

令和7年度(2025年度)

第31回全国進学指導研究大会

中国・山口大会

大会テーマ

「時代の変化を恐れず、生き抜く力を育む進学指導」



期 日 令和7年10月2日(木)～3日(金)

会 場 海峡メッセ下関

主 催 全国高等学校進路指導協議会
中国地区高等学校進路指導協議会

後 援 文部科学省
全国高等学校長協会
公益財団法人日本進路指導協会
中国地区各県教育委員会
公益財団法人日本教育公務員弘済会山口支部
一般社団法人下関観光コンベンション協会

主 管 山口県高等学校進路指導協議会

目 次

・ 令和7年度第31回全国進学指導研究大会(中国・山口大会)に寄せて	1	ページ
・ 開催要項	2 ~ 3	ページ
・ 記念講演	4	ページ
・ 基調講演	5 ~ 6	ページ
・ 大学紹介	7	ページ
・ 第1分科会 発表要旨	8 ~ 15	ページ
・ 第2分科会 発表要旨	16 ~ 22	ページ
・ 第3分科会 発表要旨	23 ~ 32	ページ
・ 第4分科会 発表要旨	33 ~ 40	ページ
・ 実践発表 発表要旨	41 ~ 42	ページ
大会役員	43	ページ
全国進学指導研究大会規定	44	ページ
全国高等学校進路指導協議会役員等	45	ページ

令和7年度 第31回全国進学指導研究大会(中国・山口大会)に寄せて

全国高等学校進路指導協議会
会 長 吉 田 寿 美
(東京都立調布北高等学校長)

令和7年度 第31回全国進学指導研究大会(中国大会)が、中国地区高等学校進路指導協議会主催の下、文部科学省、全国高等学校長協会、公益財団法人日本進路指導協会、公益財団法人日本教育公務員弘済会山口支部、中国地区各県教育委員会の御後援をいただき、ここ山口県下関市「海峡メッセ下関」で開催されます。開催地の山口県下関市は、本州の西端に位置し、三方を海に囲まれ、美しい自然景観、歴史的建造物、陸路と海路の交通の要所等、自然と文化に恵まれた山口県最大の都市です。本大会では、望ましい進学指導のあり方を研究するために、中国地区の企業や大学による講演や高等学校による実践研究発表に基づいて、全国から参加された方々が意見交換を行い、今後の全国の進学指導の向上を目指しています。開催にあたり、主催の中国地区高等学校進路指導協議会をはじめ、開催に携わられた多くの方々の御協力と御支援に厚く御礼申し上げます。

文部科学省は、キャリアとは『人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分との関係を見だしていく連なりや積み重ね』、キャリア教育とは『一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育』と定義しています。これまでも学習指導要領や中央教育審議会答申には、キャリア教育の必要性や趣旨が示されてきましたが、平成29年3月に告示された「小学校及び中学校学習指導要領」、平成30年3月に告示された「高等学校学習指導要領」の総則には、改めてキャリア教育という言葉を用いてその充実を図ることが明示されました。高等学校では、以下のように示されています。

第1章総則 第5款 生徒の発達の支援 1 生徒の発達を支える指導の充実

(3) 生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。

このように、学習指導要領の第1章総則に明示されたということは、特定の教科・科目等ではなく、キャリア教育は教育課程全体に係るということです。進路講演会、職場体験、先輩の話聞く会等だけがキャリア教育ではなく、学校の教育課程全体がキャリア教育であること、又、将来の夢を描くだけではなく「働くこと」の現実認識と「働くこと」に必要な資質・能力の育成をしっかりと行うことが求められています。「中学校・高等学校キャリア教育の手引き(文部科学省・2023年3月)」でも、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016年12月)を踏まえ、「主体的な学び」を『①学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性に関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。』と捉え、興味・関心、自己のキャリア形成の方向性との関連付け、見通し、振り返り、継続性の大切さを掲げています。産業構造や社会システムが「非連続的」とも言えるほど急激に変化する現在、学校でのキャリア教育への期待は益々高まっています。そして、各学校のキャリア教育には、生徒一人一人が、個性・能力を生かし、時代の変化に柔軟に対応し生き抜く力の育成が求められています。

本大会のテーマは、『時代の変化を恐れず、生き抜く力を育む進学指導』です。まさに、キャリア教育最前線の課題です。参加者の皆様が、本大会で多くの学びを得られることを願っています。

中国大会の御盛会をお祈りいたします。

開 催 要 項

令和7年度(2025 年度)第 31 回全国進学指導研究大会(中国・山口大会)

1 目的

望ましい進学指導のあり方を研究するため、高校現場の進路指導関係者が一堂に会し、それぞれの立場から意見交換を図ると共に、教育の質を高める。

2 主催

全国高等学校進路指導協議会、中国地区高等学校進路指導協議会

3 後援

文部科学省、全国高等学校長協会、公益財団法人日本進路指導協会、
中国地区各県教育委員会、公益財団法人日本教育公務員弘済会山口支部、
一般社団法人下関観光コンベンション協会

4 会場

海峡メッセ下関 4階イベントホールほか
(山口県下関市豊前田町3丁目3-1 電話083-231-5600)

5 大会テーマ

「時代の変化を恐れず、生き抜く力を育む進学指導」

6 大会日程

(1) 第1日目(10月2日(木)、海峡メッセ下関 4階イベントホール)

9:00～12:00 会場準備

12:00～13:00 受 付 (4階イベントホール入口)

13:00～13:30 開 会 式

ア 開 式 宣 言	大会副委員長	中国地区高等学校進路指導協議会	副会長	堀尾 英明
イ 大会長挨拶	全 国 高 等 学 校 進 路 指 導 協 議 会	会 長	吉田 寿美	
ウ 大会委員長挨拶	大 会 副 会 長	中国高等学校進路指導協議会	会 長	渡邊 勝義
エ 来 賓 祝 辞	山 口 県 教 育 委 員 会	教育長	繁吉 健志	様
オ 来 賓 紹 介	大会副委員長	中国地区高等学校進路指導協議会	副会長	山本 弦
カ 閉 式 宣 言	大会副委員長	中国地区高等学校進路指導協議会	副会長	堀尾 英明

13:40～14:50 記念講演

講演題「『GoodはGreatの最大の敵』から」

講師 株式会社 ひびき精機 取締役 会長 松 山 英 治 様

15:10～16:20 基調講演

講演題「人口減少期・人口流出地域にある高校の進路指導」

講師 公立大学法人 山口県立大学将来構想推進局
附属高等学校設置準備室・高大連携推進室 室長
文部科学省総合教育政策局CSマイスター
竹 村 和 之 様

16:30～17:00 大学紹介

「下関市立大学のあくなき挑戦」

発表者 公立大学法人下関市立大学副学長(教育) 菅 正 史 様

(2) 第2日目(10月3日(金)、海峡メッセ下関 10階国際会議場ほか)

9:30～10:00 受付(10階ロビー)

10:00～11:15 分科会(発表(20分×2名) 質疑応答(15分)指導助言(10分))

ア 第1分科会(8階804会議室)

テーマ「上級学校や地域との連携を活かした進学指導」

①「地域連携を取り入れた探究学習プログラム実践と進学への生かし方」

島根県立松江東高等学校 主幹教諭 岩根 勝利

②「地域連携と探究活動で未来を切り拓く進学指導」

岡山県立玉島高等学校 教諭 金田 修一

・指導助言

鳥取県教育委員会事務局 高等学校課指導主事 板持 俊博 様

イ 第2分科会(8階805会議室)

テーマ「探究活動と進学指導」

①「生徒一人ひとりの探究活動を生かす進路支援」

学校法人鶏鳴学園青翔開智高等学校 校長 織田澤 博樹

②「探究活動と未来の学びを結ぶ」

広島県立安古市高等学校 教諭 中里 富洋

・指導助言

島根県教育庁学校教育課 高等学校教育推進スタッフ指導主事 中村 美楠子 様

ウ 第3分科会(8階801会議室)

テーマ「一人一台端末環境での進学指導」

①「できることから少しずつ」

山口県立宇部高等学校 教諭 林 克佳

②「自律分散型進路指導の進化～生徒の「will」を育み、学びの主体性を引き出すDX戦略～」

島根県立隠岐島前高等学校 教諭 飯野 卓

・指導助言

岡山県教育庁高校教育課 指導班指導主事(主幹) 忠政 計志 様

エ 第4分科会(10階国際会議場)

テーマ「進学に結びつく基礎学力定着の取り組み」

①「「高い志」育む進路指導」

岡山県立岡山朝日高等学校 指導教諭 田中 晴美

②「学びと向き合うプロジェクト」

鳥取県立境高等学校 教諭 手島 斉人

・指導助言

広島県教育委員会事務局 学びの変革推進部 高校教育指導課
高校教育指導担当 大井 悠一朗 様

11:30～11:50 実践発表(10階国際会議場)

題目「多様化する大学入試に向けた指導実践について」

山口県立下関西高等学校 教諭 松村 成通

12:10～12:30 閉会式(10階国際会議場)

ア 開式宣言	大会副委員長	中国地区高等学校進路指導協議会	副会長	堀尾 英明
イ 大会長挨拶	全国高等学校進路指導協議会	会長	吉田 寿美	
ウ 次期開催挨拶	長野県高等学校進路指導協議会	次期会長	吉岡 和久	
エ 閉式宣言	大会副委員長	中国地区高等学校進路指導協議会	副会長	堀尾 英明

記念講演

『GoodはGreatの最大の敵』から

講師 株式会社 ひびき精機 取締役会長 松山 英治 様

1 プロフィール

1953年6月	長崎県佐世保市生まれ
1972年3月	山口県立下関工業高校機械科卒業
1972年4月	松山製作所入社
1975年4月	(有)ひびき精機工作所(当社)入社
1988年4月	当社専務取締役就任
1992年6月	(株)ひびき精機に組織変更、専務取締役就任
1997年10月	当社代表取締役就任
2025年4月	当社取締役会長就任



2 講演要旨

「これで良い」は成長の妨げになってしまう。

(株)ひびき精機は「社員の成長なくして会社の成長はあり得ない」という考え方が基本ですが、多くの社員が自分の現状に満足し「これで良い」と思うと、なぜかそこで成長が止まってしまう。

そんな歯がゆい思いの頃に出会ったのが、吉野弘さんの「ある高さ」という詩であったり、『GoodはGreatの最大の敵』という言葉でした。

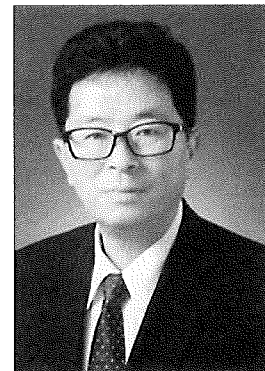
(株)ひびき精機の目的のひとつに「モノづくり人材の育成、一流の職人を育てる」ということがあります。しかし長年経営を続けていく中で、思うように成長ができない人もたくさん見てきました。社員が増え、その社員と家族の物心両面の豊かさを追求していく中で、私自身もさまざまな経験をしてきましたのでその格闘について紹介したいと思います。

人口減少期・人口流出地域にある高校の進路指導 ～生徒の進路に“ふるさと”を位置付ける～

講師 公立大学法人山口県立大学将来構想推進局
附属高等学校設置準備室・高大連携推進室 室長
文部科学省総合教育政策局CSマイスター
竹村 和之 様

1 プロフィール

1965年 3月 山口県周南市生まれ
1983年 4月 広島大学教育学部教科教育学科入学
1987年 4月 山口県公立学校教員採用(熊毛南・久賀・防府西高校)
1998年 4月 山口県教育庁(教職員課・教育政策課・文部科学省)
2015年 4月 山口県立高等学校教頭(周防大島高校)
2017年 4月 山口県立高等学校校長(豊北・下関北、萩、岩国高校)
2024年 4月 現職

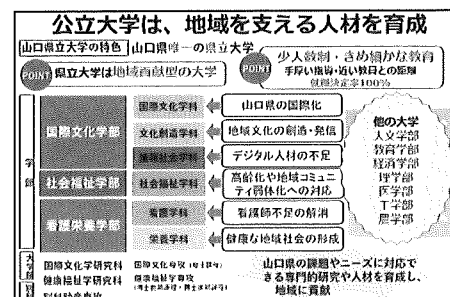
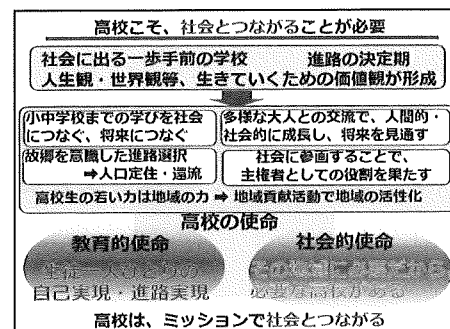
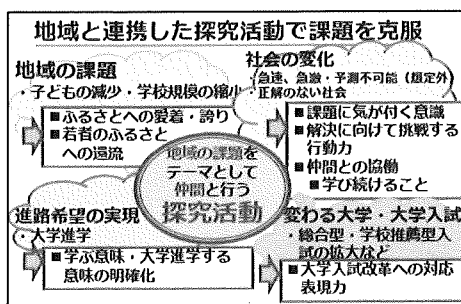
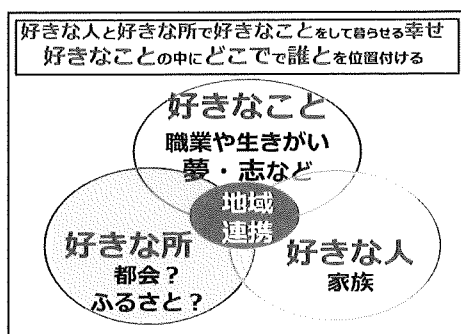


2 講演要旨

若者の都市部への憧れは強く、その流出が続いています。どこに住んでいようと、子どもたちが、自分の将来に明るい見通しを持ち、豊かな人生を歩んでいくために、また、人口減少が進む地域を守り、活性化していくために、高校の果たすべき役割は大きく、高校が今、踏ん張らなければならないと強く感じています。

「時代の変化を恐れず、生き抜く力を育む進学指導」をテーマとして掲げて開催される本研究大会の開催要項に目を通すと、分科会の実践事例発表に「地域との連携」「探究活動」といった用語が並んでいます。おそらく、これらの取組が、高校や地域が抱える課題解決のキーワードになるのでしょう。

この「地域との連携」と「探究学習・活動」について、これまで山口県内の高等学校で校長を務めてきた経験に加えて、コミュニティ・スクール(CS)の視点、山口県立大学で取り組んでいる高大連携の視点から、少しでも参考になるお話ができればと思っています。



1 30年後、住むところを間違えるな！

2 地域と連携した探究学習・活動で、生徒の進路に“ふるさと”を位置付けましょう！

(1) 地域と連携した取組の実践事例

(2) 地域・社会とつながることが必要な高校

(3) 高校を取り巻く課題

(4) 地域をテーマとした探究学習・活動の実践事例

(5) 地域連携、探究学習・活動を組織的・継続的に展開する高校コミュニティ・スクール

3 高校と大学が連携して、時代の変化や地域の課題を乗り越えましょう！

(1) 公立大学は、地域を支える人材を育成

(2) 高大連携の実践事例

「下関市立大学のあくなき挑戦」

公立大学法人下関市立大学
副学長（教育） 菅 正史 様

1 下関市立大学の概要

下関市立大学は、1956年に下関商業短期大学として開学、1962年には4大化し下関市立大学が開学しました。短大から数えると、来年度で70年目を迎える、歴史のある公立大学です。

立地面では、修学に適した閑静な住宅街に位置しながら、近隣には幡生駅・新下関駅や高速道路ICがあり、小倉・天神や広島方面にもアクセスしやすい環境にあります。

長く経済学部の単科大学として発展してきた本学は、現在大きな変革の時期を迎えています。2024年度にデータサイエンス(DS)学部、2025年度には看護学部が開設し、文系(経済)・理系(DS)・医療系(看護)の3学部からなる総合大学となりました。大学院等も含めた収容定員は2190名と、公立大学で14番目の規模となりました。

本学の特徴は、学生の多様性にあります。地方の公立大学ですが、地方試験会場・公立大学中期日程入試を行っており、西日本を中心とする全国各地から学生を集めています。男女構成でみても、2025年度入学生は約半数を女性が占めるようになりました。アジアやヨーロッパからの留学生も在籍しています。

高い就職率も本学の特徴の一つです。最近では若手人材不足により新卒採用に積極的な企業が多いですが、コロナ禍など全国就職率が低下した際も、本学は高い就職率を維持してきました。

ここでは、経済・DS・看護の各学部の特徴にも触れながら、本学の概要・特徴を説明したいと思います。

2 下関市立大学のあくなき挑戦

少子化が進む中、高等教育機関としての大学は転換期を迎えています。2024年の出生数は69万人を割り込み、本年6月時点の下関市の0歳人口は1,107名まで減少しています。地域の人々の「学びたい」という要望から開学した本学ですが、高等教育の機会を維持するには、地域内外から広く支持される大学となることが求められています。

この状況を鑑み、新しく策定した地方独立行政法人法に基づく第4期中期計画では、3つの学部の教育の着実な実施はもちろん、研究活動や外部資金獲得、国際交流などに関する野心的な目標を設定し、国内外から注目される大学となることを目指しています。

中でも国際交流については、コロナ禍や昨今の円安の影響で、留学等の海外での学修を経験する学生が減少している中、協定校・受け入れ学生数の拡大を通して、日本にしながら世界の文化等に触れることのできる機会が持てる環境づくりを目指しています。

地域連携を取り入れた 探究学習プログラム実践と進学への生かし方

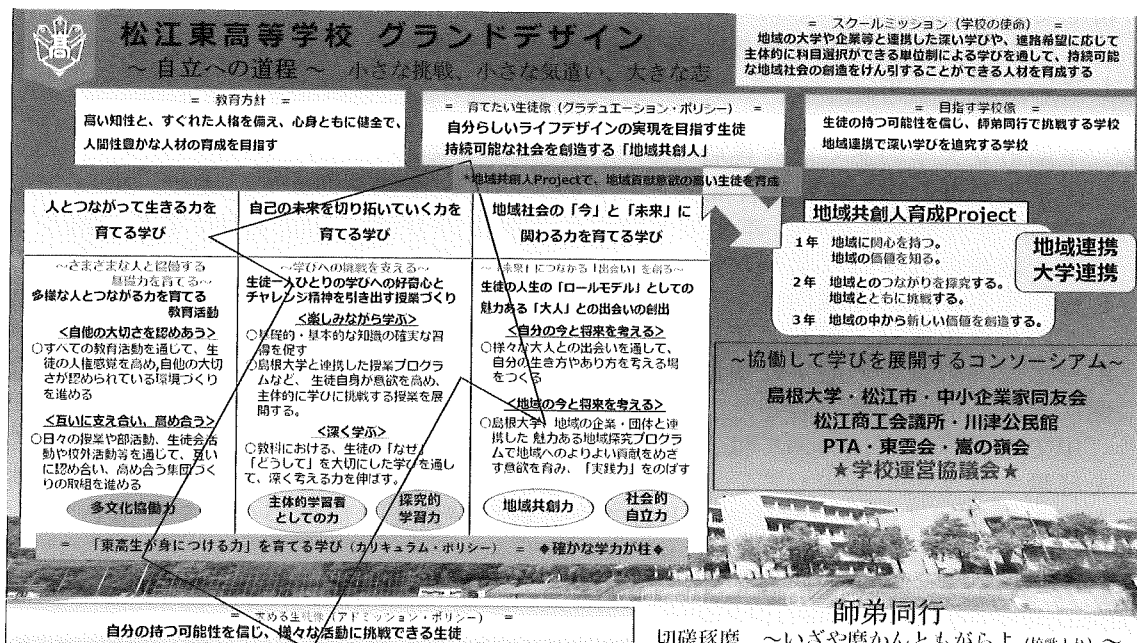
島根県立松江東高等学校 主幹教諭 岩根 勝利

1 はじめに（学校紹介・校風やグランドデザイン）

1983年(昭和58年)に開校し、今年度で創立43年目を迎える。令和元年度から令和3年度にかけ、文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、「中核市発 持続可能な社会を創造する「地域共創人」の育成」を研究開発した。令和3年度から松江市内の県立普通科3校の学区が廃止され、各校に魅力化が求められる中、本校は「地域共創人の育成」を魅力化の1つに位置付けている。

創立当初より「高い知性と、優れた人格を備え、心身ともに健全で人間性豊かな人材の育成をめざす」という教育方針を掲げ、「師弟同行」をモットーに、志を大事にし挑戦を後押しする校風がある。グランドデザイン（《図1》参照）において、「自立への道程（みち）～小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志～」を本校教育の根底に位置づけ、「生徒のもつ可能性を信じ、師弟同行で挑戦する学校」「地域連携で深い学びを追究する学校」を目指す学校像としている。教育目標は①自己の未来を切り拓いていく力の向上（学力）②人とつながって生きる力の向上（人間力）③地域社会の今と未来に関わる力の育成（社会力）を3つの柱としている。そして、育てたい生徒像として「自分らしいライフデザインの実現を目指す生徒」「持続可能な社会を創造する地域共創人」を掲げている。

《図1》



2 グランドデザインと探究学習の関連

「地域共創人の育成」を達成するために「地域共創人育成プロジェクト」がある。これは、キャリア教育的視点がやや弱かった本校が進路実現・自己実現のためだけでなく、地域社会の「今」と「未来」にかかわる力を育み、地域貢献が将来の働きがいや生きがいにつながる学びとなるように、魅力化の中核に据えたものである。このプロジェクトは、総合的な探究の時間と学校設定科目である「EAST地域探究」を中心に据え展開しており、これらの授業は本校での探究学習の主となるものである。

令和元年度は曖昧だったが、ここ数年で探究学習プログラムを整理して、グランドデザインにおける育てたい生徒像である「自分らしいライフデザインの実現を目指す生徒」

「持続可能な社会を創造する地域共創人」と探究学習プログラムの関連付けを明確化（《図2 参照》）している。

《図2》

＝ 育てたい生徒像（グラデュエーション・ポリシー）＝													
自分らしいライフデザインの実現を目指す生徒							持続可能な社会を創造する「地域共創人」						
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	地域探究Ⅰ	導入期	地域課題探究Ⅰ-1 「東高の魅力探究」						地域課題探究Ⅰ-2 「松江市の魅力探究」				
	進路探究Ⅰ						ライフデザイン探究Ⅰ 「学問の魅力探究」						
2年	地域探究Ⅱ	チームビルド	地域課題探究Ⅱ-1 中間発表会に向けた活動			地域課題探究Ⅱ-2 成果発表会に向けた活動							
	進路探究Ⅱ						ライフデザイン探究Ⅱ-1 東京研修旅行				ライフデザイン探究Ⅱ-2 自己理解と自己表現		
3年	地域探究Ⅲ	地域課題探究Ⅲ 「EAST地域探究」 ※選択者のみ											
	進路探究Ⅲ	ライフデザイン探究Ⅲ-1 表現力育成					ライフデザイン探究Ⅲ-2 地域への理解 学園祭発表会の聴講				ライフデザイン探究Ⅲ-3 社会人としての生き方		

3 探究学習の具体（地域課題探究について）

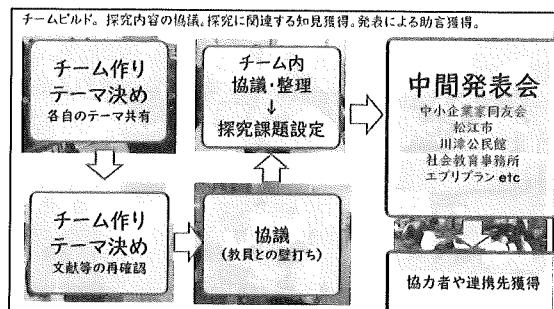
探究学習において地域共創人の育成を目指す学習でのポイントは、人と関わりながら物事を成し遂げていこうとすることである。学年が進むにつれ、対象を校内から校外（地域）へと広げていき、地域社会にかかわる力を育みつつ将来の働きがいや生きがいにつながるようにねらいを定めている。

1年の入学当初に、共創の基盤となる他者と協調し対話するための心構えを体験的に学ぶ。1年1学期では「東高の魅力探究」により、入学した生徒にとって最も身近な地域として本校を題材に探究のサイクルを体験する。1年2学期前半には「学問の魅力探究」と称し、2年の文理選択を見据えつつ生徒自身が学びたいことを考えていくために学問に焦点をあて探究を行う。そして1年2学期後半から「松江市の魅力探究（MATSUE探究Ⅰ）」において、地域と関わるため松江を題材に探究を進める。このMATSUE探究Ⅰでは、地域のことを知らない生徒が多いため、松江の魅力や課題を知ることから始める。2年生の成果発表会を見てゴールイメージを持ちつつ、地域でどんなことができるのかを考えさせる。その後、地域の人からの講話や地域の人との対話を行っていく。2年で行う地域での探究活動に向けて、先輩・大学生・社会人と段階的に関わってくれる人の年齢層を変えていき、誰とでも話ができるようになるトレーニングも兼ねている。

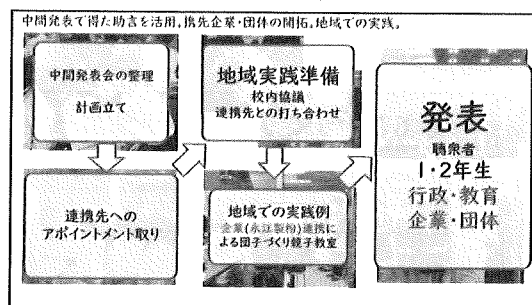
2年では「MATSUE探究Ⅱ」とし、探究テーマが近いものでチームを編成し、地域の課題や魅力について深掘りしていく。夏休み前に中間発表会を行い、自分たちの考えを行政・地元企業等の方々に聞いていただき、協力者や連携先を探すきっかけとして、2学期のフィールドワークへつなげていく。2学期には協力者や連携先へのアポイントメント取りを行い、フィールドワーク（連携先との協議、連携先での実践）へとつなげ、その成果（実践報告や提案など）を12月の成果発表会で、1・2年生・教職員・地域の方々に向けて行う。



2年 総合的な探究の時間 1 学期：MATSUE探究Ⅱ



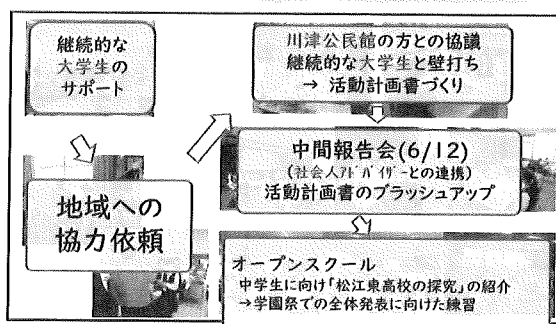
2年 総合的な探究の時間 2 学期：MATSUE探究Ⅱ



3年では、学校設定科目「EAST地域探究」を選択した生徒のみが、伴走者として県内大学生の協力を得ながら、個人で地域での実践を取り入れた探究学習を半年間で行い、その成果を学園祭にて全校生徒などに向けて行う。

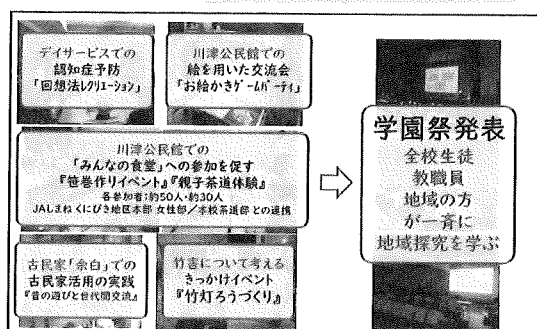
地域の中から新しい価値を創造する

3年 EAST地域探究 第Ⅱ期



地域の中から新しい価値を創造する

3年 EAST地域探究 第Ⅲ・Ⅳ期

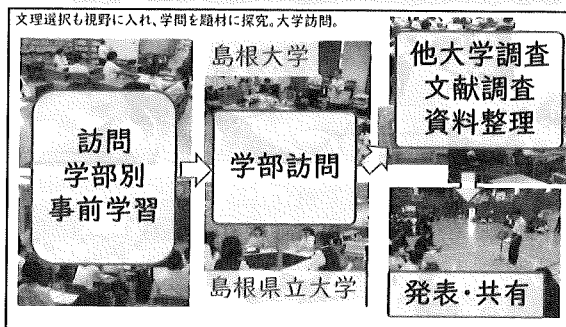


4 進学へ生かそうとするプログラム内容

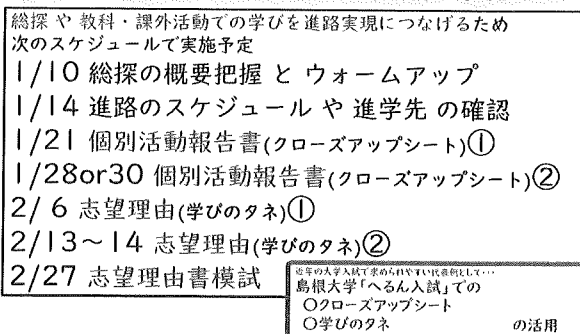
探究学習の中で「学問の魅力探究」「東京研修旅行」「自己理解と自己実現」「表現力育成」といったライフデザイン探究により、生徒自身が将来を見据えやすくするとともに、探究学習などの高校での様々な学びの成果を進学へ生かしやすくなるようにプログラムの工夫をしている。

1年2学期の「学問の魅力探究」では、県内の大学（島根大学・島根県立大学）を訪問するとともに書籍やWEBを活用し県外大学も含め様々な学問について知る。2年2学期には「東京研修旅行」において、都市部の大学での学びや都市部の企業見学をするとともに、都市部で活躍する方々との座談会を行い人生の多様なロールモデルを獲得する。2年3学期には「自己理解と自己実現」において、自己の進路希望に合わせた志望理由書を作ることを目標に活動を行うが、対話力を生かして、個人でこれまでの学びの成果を振り返ったあとに、俯瞰してくれる存在として進学先を決めた3年生や大学生との面談を取り入れている。生徒自身だけでは引き出しにくい自己の学びや成長を引き出しやすくすることをねらいとしている。3年1学期には「表現力育成」として進路希望に応じた小論文に取り組み、夏休み明けに振り返りを行い、9月以降の総合型選抜や学校推薦型選抜に対応しやすくなるスケジュールで、プログラムを展開している。

1年 総合的な探究の時間 8月～11月 学問の魅力探究



1年 総合的な探究の時間 3 学期 自己理解と自己表現



5 まとめ

(1) 進学に結び付いた事例

① 大学生と商店街を活性化する探究に取り組み、地域政策学部へ進学

2年次で商店街活性化をテーマとして地域探究に取り組んだ生徒が、3年次で「EAST地域探究」を選択し、夏休み中に松江に帰省した大学生と一緒に地元商店街を活性化する探究を行った。この生徒は、地元商店街の店主の年齢層が高くSNSを不得手としている課題に対し、自身と大学生がInstagramを活用しイベントを盛り上げようと活動をした。この探究活動の成果を生かし、総合型選抜で島根県立大学の地域政策学部へ合格し進学した。地域に貢献した実績や大学生になってからも地域で活動したいという意欲や情熱が大学に認められたと思われる。

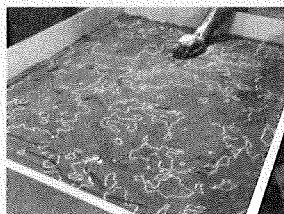


② 芸術を子どもの学びに生かす探究に取り組み、教育学部（芸術専攻）に進学

芸術（アート）に強い興味・関心があり、2年次では、海岸に漂着するゴミ問題への意識啓発を目指した制作物をつくり、市内の商業施設で展示した。3年次「EAST地域探究」で、松江では雨等で天気が悪い日が多く室内遊びをせざるをえない子どもに目を向けた。室内でも五感を刺激するような外遊びができるように松江の名産であるしじみの貝殻を地域の産業技術センターと連携し子どもが安全に遊ぶ砂を開発し、その砂を用いてアートイベントを開催した。芸術系の進路実現を目標としていたこともあり、子どもの砂遊びにおける教育的効果にも注目した探究の成果を生かして、総合型選抜で島根大学教育学部（芸術専攻）へ合格し進学した。



④ サンドアートをプロジェクターで映し出した砂場に置いて鑑賞する。

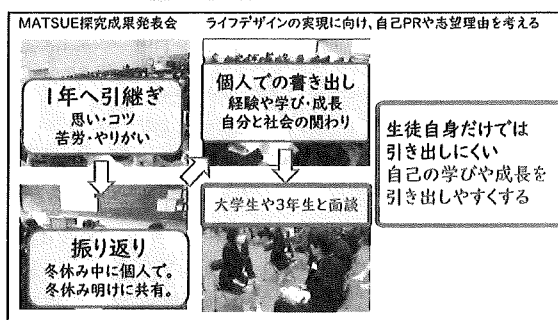


(2) 進学を支えていると想定されること

2年次の「自己理解と自己実現」での志望理由書作りは、一般選抜で大学進学を目指す生徒の支援もできていると考えている。近年では一般選抜においても出願書類や面接等で志望理由を求められるケースがあるが、多くの場合、受験の可否は受験科目の成績次第である。そのため、共通テスト後の出願先設定において、受験する生徒は自分の志望理由に不安を抱いていることは少なくない。しかし、本校ではあら

かじめ全生徒に志望理由を考えるきっかけをつくることで生徒が少しでも安心して受験先を決定できていると思われる。また、大学生との対話を盛り込んでいることは、大学での学びの意欲を湧きたてることにもつながっているおり、こうした取組が学びの原動力となっている。

1年 総合的な探究の時間 3学期 自己理解と自己表現



「地域連携と探究活動で未来を切り拓く進学指導」

岡山県立玉島高等学校 教諭 金田 修一

1 はじめに

本校は、岡山県倉敷市西部に位置し、各学年普通科5クラス、理数科1クラス、全校生徒約710名の昨年創立120周年を迎えた全日制の公立学校である。2007年（平成19年）よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、現在指定IV期の4年目となる。普通科・理数科の全校体制で「地域共創で目指す、地域や国際社会で活躍する科学技術人材の育成」の研究開発課題のもと3年間を見通した継続的な探究活動カリキュラムを特色としている。普通科は、生徒の希望と適性に応じて進路目的別クラスを編成し、より充実した授業を実施することで、生徒一人一人の学力を伸ばしている。それぞれの生徒が志望する進路の実現を図るために、きめ細かい個に応じた指導を行っている。理数科は、科学や数学に興味をもつ生徒が、1年生より実験実習や専門科目を通して探究力や創造力を身に付け、最先端の科学プログラム受けている。クラス編成は3年間変わらないが、深い生徒理解ときめ細かな指導で多くの授業で習熟度別授業を行っている。

2 SSHの活動

SSHの指定IV期の探究活動カリキュラムでは、「読み解く力」「考え実行する力」「論じ合う力」の育成を目標に、1年生で「探究基礎」、2年生で「課題探究」、3年生で「発展探究」と系統的に構築されている。理数科では、学校設定科目「TS（玉島サイエンス）探究」で研究に必要な基礎的な力や統計処理の基礎的な知識を育成するとともに、体験を重視した活動および課題研究を通して探究的視野を広げている。普通科では、学校設定科目「TP（玉島プロジェクト）探究」で企業や大学と連携して、課題に気付く力、解決する力、考えを伝える力の育成を目指している。また、普通科・理数科共通の選択科目として3年生では時程外に「発展課題研究（1単位）」が設置されており、2年生での探究を発展深化させ、校外の学会や研究発表会に挑戦している。

普通科1年生の「TP探究」では、1学期に科学技術、地域・暮らし、教育・グローバル、環境・自然災害・防災などの分野について3時間を1ユニットとするユニット学習を行う。ユニットの1時間目は、外部の専門家5人を講師に招き、様々な講義や実験を通して情報を読み取る。記録用紙にキーワードとその内容を記録し、まとめで記述する。2時間目は、その記録をもとに情報を読み解き、講義内容のスライドを作成する。聞き取った情報をまとめるとともに、図や表などを挿入し、説得力のあるスライドにする。3時間目には、異なる講師の講義を聴いた生徒5人を混合した小グループをつくり、知識構成型ジグソー法により生徒自身が聞き取った情報を発表し合い、発表する態度や発表を聞く態度を身に付ける。次に、地域の課題や解決に向けた取組を現場で触れるために、7月下旬に20カ所以上の企業や研究機関・施設と連携して行うフィールドワークがある。生徒たちが自分たちで交渉し、活動計画を立て、質疑応答などを通して地域の課題についてレポートを作成し発表する。2学期には教科横断探究を行っている。各クラスが3時間で1つの教科横断探究授業を受けていく。文理融合教科型の10のユニット（化学×書道、化学×世界史×日本史、化学×古典×日本史、数学×物理×美術、体育×物理、生物×家庭、化学×生物×保健など）が用意されており、多角的な視点で課題に取り組み探究する力を育成している。3学期には実践を重視した情報活用能力と統計活用能力の習得とともに、情報モラルの育成や実験データ等を適切な方法で集計し分析する知識や技術を習得していく。また、2年次の課題設定がスムーズに行えるように、課題発見のワークシートを用いて、課題を見つけ、その課題についてグループで話し合いを行ったりするなどして、テーマ設定や探究活動の計画を立てる取組を行っている。

2年生では、理工学、人間環境、人文教育、社会系の4つのゼミに分かれ、生徒自身の興味や関心を基に、4～5名で1つの班を作り、研究テーマの方向性を決定する。設定したテーマに関する検証・実験・インタビュー・アンケートなどを行い、設定したテーマに沿った探究活動を行う。一人一台端末を活用し、計画書には動機や先行研究、方法などを記入し、最終的に発表に使用するポスターには①目的②仮説③研究方法④結果⑤考察⑥結論⑦今後の課題⑧謝辞・参考文献などを記載する。班員が共同編集するので、作業を分担して作成、共有ができる。また、2度行う中間発表会では生徒同士の疑問やアドバイス、大学や企業の専門家に依頼して専門的なアドバイスをもらい、自らの研究をブラッシュアップしている。また、保護者にも発表会への参加協力を依頼し、意見やアドバイスをいただいている。

3年生では、それまでの活動を論文としてまとめる。探究と進路の活動を接続し、「これまでの取組の紹介や感想」「今後にどのように生かせるか」など数項目をフォームを活用して振り返り、大学等での学びにつなげ、進路実現につなげている。

一方、理数科1年生の「TS探究」では、少人数の班単位でのオムニバス形式ユニット学習とクラス単位での協働学習を実施しており、実験・実習、講演、施設見学、フィールドワーク、プレゼンテーション研修、探究活動を一体的に行っている。オムニバス形式ユニット学習では、クラスを5班に分け、工学探究ゼミ、数学探究ゼミ、生物探究ゼミ、物理探究ゼミ、化学探究ゼミで体験を重視した実習で、知識と実験・技能を習得させている。クラス単位での協働学習では、クロムブックを活用して、情報モラルや情報スキル、プログラミングなどを学ぶ情報活用や、適切な方法でデータを集計し分析する統計活用能力を習得する統計活用Ⅰ、論理的に説明する力と科学的コミュニケーション力を習得させる実習を行う科学プレゼンテーション研修、大学や大学院生等と研究活動とともにやり、サイエンスキャリア意識の向上と研究活動に対する意欲向上を図る研究体験研修、瀬戸内海沿岸を中心に、専門家からの指導を受けフィールドワークを行う玉島サイエンスフィールドワーク、発想力を発展させ、課題を発見し解決するために必要な研究計画の見通しをたてるサイエンス探究実習が行われている。

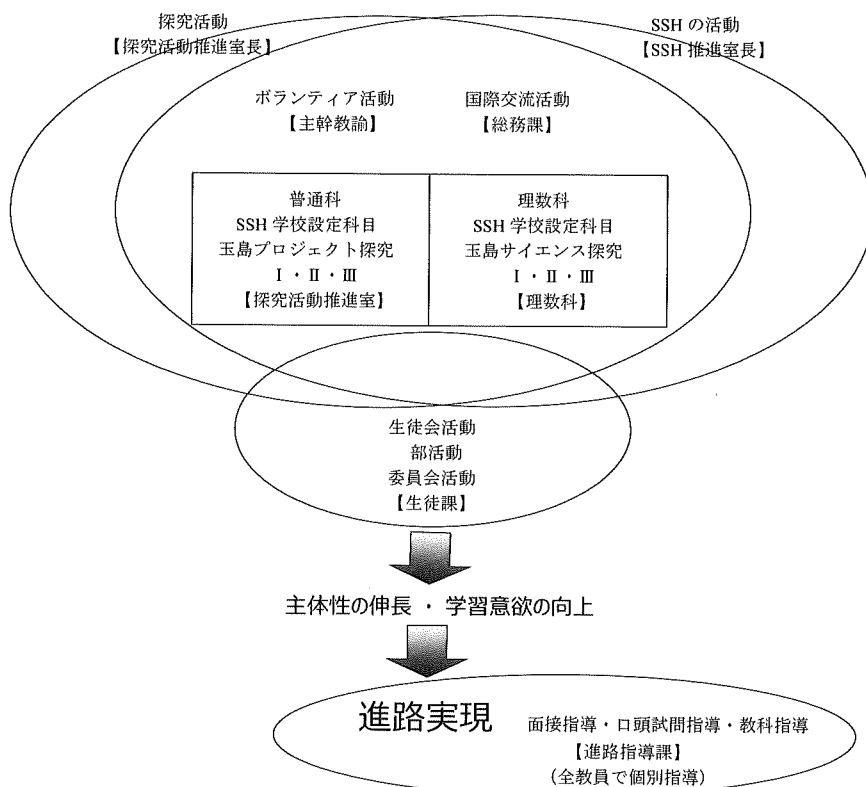
2年生では、地域や実生活における事象を俯瞰的に探究する「課題研究」、研究活動において幅広い視点と客観的な視野を育成する研究俯瞰法、実験データの適切な分析処理とデータ活用を学ぶ統計活用Ⅱ、情報活用スキルを活用したポスターやスライド作成・発表を行い、最後には論文としてまとめている。また、研究機関や地域施設等を訪問し先端的研究の現状を学ぶ研究施設訪問研修も行っている。

3年生では、探究の成果を地域社会への還元を意識した学会・研究発表会での発表や探究レポート作成等に取り組み、3年間の探究活動の継続性を図り、普通科同様に、探究と進路の活動を接続し、大学等での学びにつなげ、進路実現に繋げている。

理数科には、県内外の課題研究発表会の機会が多くあるが、普通科や総合学科では探究の成果を校外で発表する機会は多くない。そこで、2019年度から普通科と総合学科を対象とした「探究活動プレゼンテーションアワード」を本校が主催して、開催している。体育館でのポスター発表の準備、当日の司会進行など2年生を中心に運営し、他校の生徒との交流やお互いのプレゼンテーション能力の向上を目指している。講評には県教育委員会の指導主事や岡山大学の教員、中国職業能力開発大学の教員が当たる。少しずつ規模が拡大し、令和6年度は県内16校、40チーム以上が参加した。

これ以外の岡山大学・岡山県立大学で行われる探究発表会や高梁川流域SDGsフェスタやディスカッション発表会など、外部での活動にも積極的に参加している。校外の探究活動への参加数は年間延べ2000人を超えている。

図 1 玉島高校の指導体制



学力の三要素は独立したものではなく、
密接に関連し合い、お互いに影響し合うものではないでしょうか？
探究活動を通してどのように学力が伸長していくのかと問われると
(例えば)

課題研究に取り組む

⇒仮説・検証・結論を繰り返す

「思考力・判断力・表現力等の能力」の伸長

⇒ポスターにまとめて班で発表する

「主体性・多様性・協働性」の伸長

⇒課題研究の経験によって大学や社会で取り組みたいことを見だして志望校を決める

学びたいことが学べる大学を志望校にする

⇒志望校に合格するために入試に求められる教科の学習に自ら取り組むとともに、

大学での研究活動には基礎的な知識・技能が必要だと自覚する

「基礎的な知識・技能」の伸長

⇒志望校合格を目指し、総合型選抜・学校推薦型選抜から積極的に挑戦する

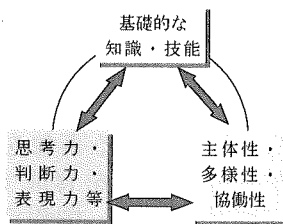


表 1 令和6年度
活動報告書集計

分類	分類名	1年生	2年生	3年生	合計
1	サイエンスボランティア	53	164	5	222
2	学会	0	13	0	13
3	研究発表会	0	76	13	89
4	論文投稿	0	0	0	0
5	論文コンテスト応募	153	84	15	252
6	SSH 行事	66	30	0	96
7	探究活動・グローバル	399	254	31	684
8	科学オリンピック	18	6	5	29
9	講演会・講義	67	53	54	174
10	教員・先進校視察	0	0	0	0
11	教員・学会発表	0	0	0	0
12	社会貢献活動(ボランティア)	613	951	339	1903
13	その他	9	25	0	34
14	資格・検定・表彰	5	0	4	9
15	オープンキャンパス・医療体験	15	25	8	48
合計		1398	1681	474	3553

3 探究活動の校内体制

全校体制での探究活動は、SSH推進室、探究活動推進室、理数科を中心に展開されている。普通科においては、2022年度に設置された探究活動推進室が効果的に機能している。指導教諭5名と各学年の担当2名で、探究活動の企画、運営の中心を担っている。また、探究活動・社会貢献活動への参加や派遣依頼、案内依頼など学校への依頼の窓口は探究活動推進室長に一本化している。この室長が、「探究活動」「SSH行事」「国際交流」「社会貢献活動・ボランティア活動」「その他」に分類し、生徒にClassroomで参加案内を配信している。

生徒は、活動後に「活動名・実施日・主催者・活動内容」などを記入した活動報告書を提出し、進路指導課ではこの活動報告書をポートフォリオとして生徒ごとに保管している。年度末や学期末には、そのデータを指導要録に記載するシステムも整備されている。

4 国公立大学への進学実績

下表2のように、令和以降国公立大学への進学実績を年々伸ばしている。これはSSHⅢ期で「科学的探究活動カリキュラムの開発」、「発展的教育活動法」、「全校体制の推進・成果の普及」の研究開発課題で進めてきた成果によると考えられる。それにより生徒に「科学的マネジメント力」、すなわち科学的な知識・技能を基本として、科学的発想によって課題を発見する力、他者と協力しながら課題を解決する力、そして成果を発信する力を身に付けることができている。また、運営指導委員や近隣大学、地域の方々がサイエンスサポーターとして本校を支えていただける体制や国公立大学の総合型・学校推薦型入試における全教職員による手厚く・丁寧な生徒指導体制ができたからだと考える。

多くの生徒が探究活動やイベントやボランティアで得たものを進路選択や進路決定に生かし進学している。総合型・学校推薦型入試では、地域とつながっているから地域課題を志望理由に書くことや実地検証した経験を語ることができている。その結果として国公立大学の総合・学校推薦型入試の合格率が伸びた要因だと分析する。

年度(卒業生)	R6	R5	R4	R3	R2	H31
卒業生徒数(人数)	229	231	206	271	272	268
大学・短大進学率(%)	86.0	90.0	85.0	85.2	85.3	85.8
共TⅠ総合・推薦型入試合格率(%)	19.2	22.5	19.4	17.3	18.3	11.9
共TⅡ総合・推薦型入試合格率(%)	1.3	4.3	1.9	3.6	4.0	1.4
総合・推薦型入試合格率(%)	20.5	26.8	21.3	21.0	22.4	13.4
一般入試合格率(%)	13.5	12.9	14.5	14.7	11.0	17.5
国公立大学進学率(%)	34.1	39.8	35.9	35.8	33.5	30.6

表2 玉島高校 国公立大学進学率

5 おわりに ー探究が進学につながるー

卒業生たちは、自分たちの興味・関心に基づいた探究活動ができ、その経験が外部行事への参加や進路選択につながった。生徒は、イベントやボランティアで幅広い年齢層の人々と関わり、コミュニケーション力も高まったと振り返っている。教員は、探究活動やボランティア活動が生徒の志望動機や推薦書に深く関わり、進路決定において有効な武器となっていると考える。

今後については、探究活動だけでは大学を合格することは難しく、基礎学力の定着が欠かせない。また、教員の進路指導力の強化も課題である。

「生徒一人ひとりの探究活動を生かす進路支援」

学校法人鶏鳴学園青翔開智高等学校 校長 織田澤 博樹

1 はじめに——地域課題が促す「問い」の学び

本校（青翔開智中学校・高等学校）は、鳥取県鳥取市に2014年に開校した中高一貫校である。開校当初より「探究・共成・飛躍」からなる「建学の精神」を教育の中心にすえ学校運営をおこなってきた。「探究」は学びを司る精神であり地域に潜在する課題を教育資源と捉え、生徒が主体的に創造性を発揮して課題解決へ挑むためにある。「共成」はコミュニケーションを司る精神であり、自分と自分、自分と他者、社会や自然とどのように共存するかを追求するためにある。「飛躍」は進路を司る精神であり“想像もつかなかった自分に出会う”という願いを込め自分自身の真の価値観に気づき未来を創造するためにある。本稿では特に「探究」と「飛躍」を取り上げ、6年間にわたる探究活動が、どのように生徒一人ひとりの進路形成に接続しているかを報告する。

2 探究活動の体系化——6年間ロードマップ

本校は週32時限、1時限50分授業を採用している。このうち週2時限を「探究」の授業にあて、体系立てた中高6年間の探究活動をおこなっている。図1に示すように、6年間のカリキュラムは中1～高3を3つのフェーズで設計した。クリエイティブフェーズとアカデミックフェーズはグループで探究活動をおこない、パーソナルフェーズは個人で探究活動をおこなう。

(1) クリエイティブフェーズ（中1・中2）

「好き」と社会課題を出会わせる段階。フィールドワークなどを通して身近な疑問や関心を問いに変え、解決するアイデアを創造する。生徒の探究的姿勢の芽生えを重視し、問い続けるプロセスを尊重する。中学段階から「探究」という授業としてカリキュラムに位置づけ、全員が必ず取り組む仕組みとしたことが、生徒全体の資質向上と文化醸成に大きく寄与している。

(2) アカデミックフェーズ（中3・高1）

データ分析や論証的思考、AI活用を通して仮説検証の力を磨く。文献調査やインタビューなど、手法の幅を学ぶ中で、根拠をもとに考える力を育てる。ICT活用やSTEAM的視点も取り入れ、テクノロジーを活用した課題解決型学習の素地を培う。

(3) パーソナルフェーズ（高2・高3）

1万字を超える探究修了論文の執筆を通じて、自己の問いと進路を接続する。これにより、生徒は「自分は何を学びたいのか、なぜその道に進むのか」を言語化し、進路選択への確信を深めていく。生徒には担当の教員が1名つき研究を進める。論文は内容・表現・体裁・引用方法が精査され、担当教員の確認を経て、全員が完成させ提出する。

これらを一貫した枠組みとして、デザイン思考を導入し、「共感→課題設定→アイデア→試作→検証」のサイクルを基盤としている。また、令和6年度からはシステム思考を導入し、生徒は探究の様々なプロセスを構造化する考え方を学んでいる。

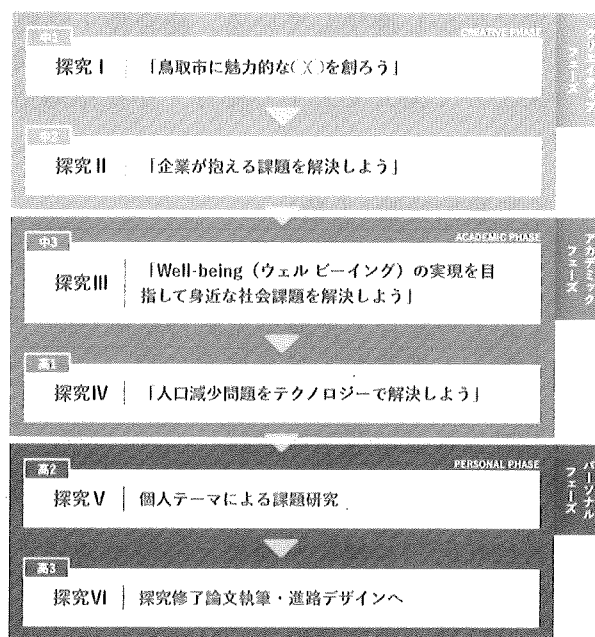


図1 6年間の「探究」ロードマップ

3 探究と進路の結節点——全校体制で挑む探究と進路の支援

探究修了論文は高校3年生の1学期末に完成する。その結果を踏まえ、高校3年生は受験の準備にとりかかる。生徒は探究修了論文を執筆する中で、「何を学びたいのか」「どの学部を選ぶべきか」「どの大学へ進学すべきか」といった点も同時に深く探究している。また、本校では、探究修了論文の担当教員が、論文完成後はそのまま進路担当となり、生徒の受験を支援する。そのため、自らの探究成果や学問的関心が評価される総合型選抜・学校推薦型選抜などの受験方式を選択する生徒が多く、例年8割程度の生徒がこの方式を選ぶ。この中には海外大学を受験する生徒も含まれていて、本校では令和2年度入試から6年連続で海外大学へ進学者を輩出している。

進路支援に関する教員側の情報共有も欠かさない。生徒の進路に関する情報はクラウド上で一元管理され、全ての教員が情報へアクセスする。この進路情報をもとに進路支援部と高3担任は学年全体の状況を管理し、進路担当教員（探究担当でもある）は生徒一人ひとりの受験サポートをおこなう。これにより明確に役割が分担され、かつ全校体制での進路支援が可能となる。8月から12月は総合型選抜・学校推薦型選抜が本格化するため隔週水曜日の放課後に情報共有会を30分間おこなう。情報共有会は受験する学部系統が似た生徒をもつ教員が3名で1グループをつくり、グループ内で情報共有をおこなう。スケジュールや出願書類などの手続きに不備がないかを確認し、出願書類の内容や試験内容に対しての意見を交換する。試験に面談やグループワークがある場合は練習の段取りを組む。

4 成果事例——探究修了論文の論題と進路の対応

本校では探究と進路が融合した結果、一人ひとりの個性に合った進路を実現している。生徒はなりたい自分を目指し、教員はそれを支援するスタイルが確立している。前節で紹介したように探究の成果を土台としながら生徒一人ひとりの受験サポートをおこなってきた。その結果、毎年6割程度の生徒が、総合型選抜・学校推薦型選抜などで合格し、進学先を決定している（令和7年度入試52%、令和6年度入試71%、令和5年度入試54%）。

次に、探究と進路の融合は大学入学後の学びにも良い影響を与えるといえる。図2は、卒業生の探究修了論文の論題と進学先の一例である。受験方式に関わらず、多くの生徒は探究修了論文で研究した学問領域をより深く学ぶことができる大学・学部へ進学する。卒業生からは「探究のおかげで大学1年2年で受講する専門基礎科目の内容が大体わかる」「他の学生はレポートの書き方から始まるが私はすぐに書き始められる」「青翔開智の探究の授業を受けてよかった。と大学入学後にやっと実感できた」と生の声が寄せられている。一方、探究修了論文の論題とは別の学問領域の大学・学部へ進学する生徒もいる。興味ある分野だと思っていたが実際に研究してみると違った、と感じた生徒が進路を変更している。従来であれば、こうした生徒は大学進学後に興味と大学教育とのミスマッチを感じ、進路選択に後悔を覚えることがあった。高校における探究活動はこうした大学とのマッチングのズレを解消する意味でも大いに役立つのではないかと感じている。

探究修了論文の論題		進学先大学名	学部・学科
学校給食を無償で提供することで経済的に貧弱な南スーダンの子供たちは小学校の教育課程を修了することは可能か ～ユニバーサルな寄付アプリの開発で若者の社会問題への無関心をなくす～	▶	Bowdoin College	
バイオミメティクスの技術を用いて水槽の環境を回復させることは可能か	▶	長崎大学	水産/水産
ママの産後うつはかかりつけ助産師を作ることによって予防することは可能か	▶	兵庫県立大学	看護/看護
日本とノルウェーの少年保護観察の制度比較によって社会復帰に向けた個別支援策を提案できるか	▶	中央大学	法/法律
内水氾濫の浸水深に基づいて最適な避難経路を表示するGISを作ることはできるか	▶	法政大学	文/地理
スリランカのカレーと鳥取のらっきょうをコラボさせることによって農業の持続可能性を向上させることは可能か	▶	関西学院大学	社会/社会

図2 探究修了論文の論題と進学先(令和7年度入試結果 一部抜粋)

生徒は研究を通じて「自分が大切にしたい価値観」を掘り下げ、進路選択においても納得感の高い意思決定を行っている。進学後も学問的関心が継続する例が多く、大学入学後のミスマッチの軽減にもつながっている。

5 生徒の変容とエビデンス——SSH 調査データの活用

本校は平成 30 年度に文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、令和 7 年度で 2 期 3 年目を迎えた。SSH 事業は、国際的に活躍する高度な科学技術系人材の育成を目的とした取り組みであり、指定校は独自の探究カリキュラムの開発をおこなうことが求められる。文部科学省が SSH 校に在籍する生徒に対して実施した調査結果を図 3 に示す。本校は全国平均と比べ、SSH の取組みの中で「独自なものを創り出そうとする姿勢（独創性）」「発見する力（問題発見力、気づく力）」「問題を解決する力」が向上したとする割合が顕著に高い。これらの項目はまさに本校の建学の精神の一つである「探究」を構築する資質・能力である。建学の精神がカリキュラムとなり教育サービスとして生徒たちへ提供され、それを受け取った生徒たちは自分たちで資質・能力を磨き上げ自分のものにできたという実感を帯びている。また、探究は「大学進学の際の志望分野探しに役立つ」とする意見も多く、生徒の探究活動は確実に進路へ直結している。

こうした定量・定性的データは、教員間での共有だけでなく、保護者や進学先との情報連携にも資するものである。加えて、教育活動の説得力ある成果として、学校説明会や外部発信においても効果的である。

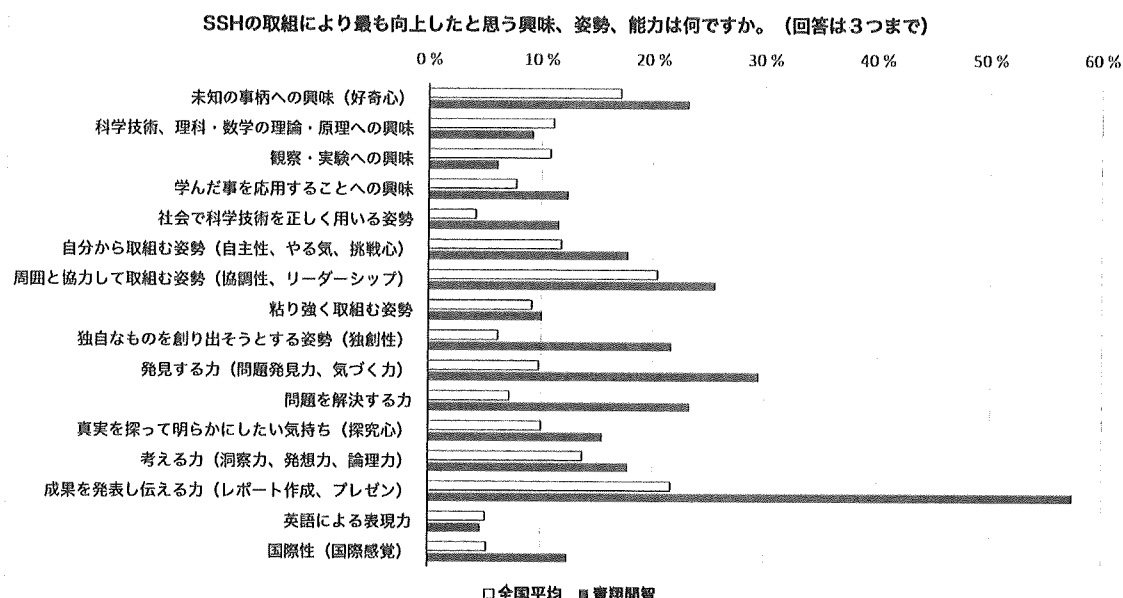


図3 SSH の取組により最も向上したと思う興味、姿勢、能力（令和 5 年度結果）

6 課題と今後の展望

今後の課題として、①教員の探究・進路に関する指導力の底上げ、②外部評価者との連携強化、③自己評価の仕組みの深化、が挙げられる。また、海外大学進学を志す生徒も増えており、柔軟かつ多様な支援体制が求められている。

今後は、探究活動の成果が「持続可能なキャリア教育」として社会に還元されることを目指し、地域や大学と連携したプログラムの開発に取り組むことも視野に入れている。また、全国の学校とのネットワークを活用し、生徒の研究発表機会の充実と視野の拡大も図っていききたい。

7 まとめ——“問い”が拓くキャリアの未来

生徒一人ひとりの探究活動は、知識の定着を超えた“自己の問い”の発見と向き合いの営みである。私たちはその問いを進路と結びつけ、「自ら選び取るキャリア」の形成を支援している。生徒が「問い続ける人」として未来を切り拓くことが、これからの教育における進路指導の本質ではないかと考える。

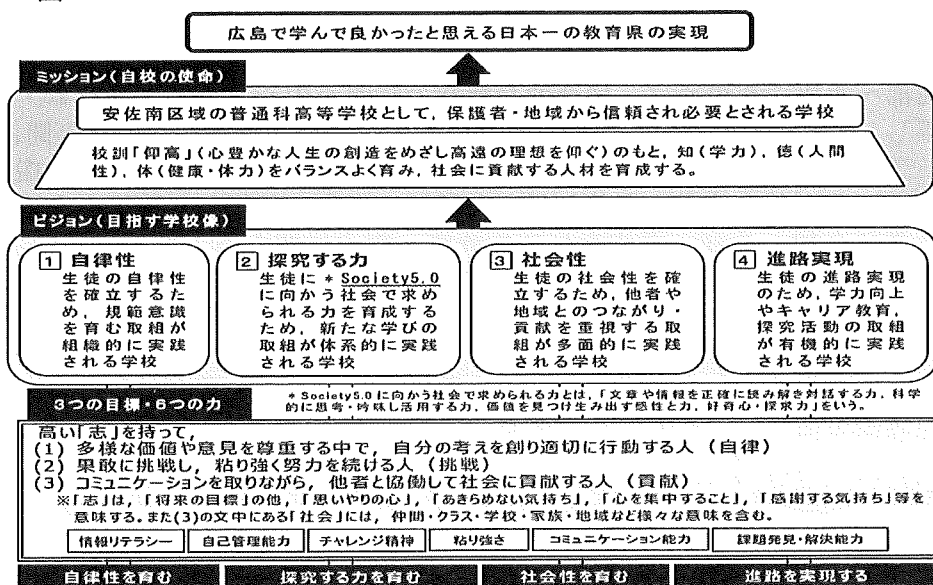
「探究活動と未来の学びを結ぶ」

広島県立安古市高等学校 教諭 中里 富洋

1 はじめに（本校概況）

昭和50年に開校、創立50周年を迎える全日制普通科高校。各学年8学級。「高い水準の進学実績」と「生徒が主体的に行う特別活動」の二本の柱を強みとし、広島市北部に位置する公立進学校として学校運営を展開しており、「学習や行事、部活動を通して、青春を謳歌することで、自己実現力を高め、夢を叶える人」を目指す生徒像に掲げ、3年間を通して校訓「仰高」（心豊かな人生の創造をめざし高遠の理想を仰ぐ）のもと、知（学力）、徳（人間性）、体（健康・体力）をバランスよく育み、社会に貢献できる人材の育成を目指した指導を行っている。（図1）

図1 広島県立安古市高等学校 ビジョンマップ



安古市 HP 学校経営



安古市HP進路関係

2 サクセスストーリー

本校の進路指導においては、キャリア教育の視点から3年間を見通したキャリアマップである「サクセスストーリー」（表1）と、毎年、キャリア教育全体計画（図1 QR参照）を作成している。全職員が生徒たちの学びの目標を共有することで、一貫性・統一性のある指導を行っている。「サクセスストーリー」は、「主な行事」・「進路LHR等」・「仰高ゼミ（総合的な探究の時間の呼称、以下仰高ゼミとする）」・「自律的な学習者に」の4項目を並列し、「仰高ゼミ」を中心に配置することで、「総合的な探究の時間」が本校の教育活動の中心であることが、視覚的にも、到達目標としてもわかる形に整えられている。加えて、毎週開かれる各学年の会議資料には、時節ごとに抜粋したサクセスストーリーを記載し、今、この時期に生徒に対してどのような働きかけを行うのかということ、一貫性を持って臨むことが可能である。また、キャリア教育全体計画では、各学年の目標に加えて、各教科・生徒指導・特別活動における指導方針、地域・保護者の願いと共通理解についてまとめ、公開している。このことから、教育活動の一貫性と、保護者・地域・学校が一体性を持って臨む指導のありかたこそが、本校の強みである。

表1 サクセスストーリー(3学年会資料より抜粋)

《サクセスストーリー》					
月	主な行事	学年集会・進路LHR等	仰高ゼミ	自律的な学習者に	指導のポイント
<1学期の目標>! 【生活】部活動や行事に完全燃焼させ、受験期に前向きに取り組む姿勢を作る。朝型の生活スタイルに修正し、1時間目から集中して授業参加する。! 【将来】仰高ゼミや進路LHRを通じてこれまで以上に、具体的に、自己の在り方・生き方について考える。また、これまでの自己の歩みを整理し、これまでの自分とこれからの自分をつなげていく。! 【学習】高校生活の総決算として、部活動・生徒会の代表として高校生活を送り、受験生として学習しなければならない最も苦しい時期である。1日の無駄な時間をなくし、集中して学習習慣を守り抜く。!					
6月	文化祭	進路LHR③(学習計画) 進路LHR④(夏休みの計画) 学研小論模試 3学年PTA進路研修会 第1回総合・推薦入試説明会	「未来の学び計画書」 仰高ゼミで探究してきたことを踏まえて、自己の進路探究を行い、将来どのようなことを学んでいきたいか、その後どのようなことをしていきたいか、そのために今何をすべきかをまとめ、夏の三者懇談会で発表する。	文化祭前の模試で、自らの目標を設定しそれを実現する。 文化祭前後、淡々と授業・補習・課題に取り組ませることを心掛ける。	文化祭の取組を充実させるとともに、学年集会やHRを活用し、県総体・文化祭後に学習へ切り替えさせ、学年全体で雰囲気作りを行う。 受験勉強の状態を確認し、学習スタイルの見直しをさせ、授業の大切さと模試の受け方・活用を含め、効率的な学習の仕方を指導する。 <u>総合型選抜・学校推薦選抜の受験対象生徒について、スケジュールの確認など準備を始める。</u>

★テーマは「完全燃焼」からの「切り換え」です!

3 マスターループブリックと安古市スタンダード

本校では、令和3年度から広島版「学びの変革」アクション・プランに基づく「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の研究指定を受け、企画研修部(令和5年度より教育企画部へ改組)を中心に、総合的な探究の時間を中心にカリキュラム・マネジメントに着手し、教育活動の見直しが図られた。さらに令和4年度からの2年間、「STEAM教育モデル校」、令和6年度からの2年間「STEAM型教育牽引校」の指定を受け、「教科等横断」と「社会実装」を兼ね備えた学びの充実を目指した取組を進めている。本校の「教育目標」及び「育成を目指す資質・能力に関する方針」については、校内研修において全教職員により令和4年度・5年度に作り上げられたものである。また、安古市高校全体で育成すべき資質・能力のマスターループブリック(表2)を明示している。卒業時に安古市生全員にこうなってほしいという姿を「安古市スタンダード」として、生徒・職員間だけでなく、安古市高校に関わる全ての方と共有し、その実現に取り組む体制の構築を進めているところである。

R7安古市高等学校全体で育成すべき資質・能力のマスターループブリック 安古市スタンダード:(卒業時安古市高生全員にこうなってほしいという姿)

資質・能力	尺度	S	A (安古市スタンダード)	B	C
<自律> 高い「志」を持って、多様な価値や意見を尊重する中で、自分の考えを創り適切に行動する ① 情報リテラシー ② 自己管理能力 <挑戦> 高い「志」を持って、果敢に挑戦し、粘り強く努力を続ける ① チャレンジ精神 ② 粘り強さ <貢献> 高い「志」を持って、コミュニケーションを取りながら、他者と協働して社会に貢献する ① コミュニケーション能力(聞く力、伝える力) ② 課題発見・解決能力(探究する力)		様々な情報や他者の意見を正しく理解し、それらを踏まえて自分の考えや価値観を見直し再構築している。そして、場面ごとに適切な発言や行動が何か考え判断しながら、自分の生活をコントロールしている。	様々な情報や他者の意見を正しく理解し、それらを踏まえて適切な発言や行動が何か考え判断しながら行動している。	様々な情報や他者の意見を踏まえて、自分の力で考え判断しながら行動している。	何事にも受け身で、自分の力で考え判断して行動することができていない。
		学校生活の様々な場面や将来の進路について、自らの目標を設定し、その実現に向けた行動計画を立てて粘り強く努力を続けている。	学校生活の様々な場面や将来の進路について、自ら設定した目標に果敢に挑戦し、粘り強く努力を続けている。	学校生活の様々な場面や将来の進路について、自ら設定した目標に果敢に挑戦している。	学校生活の様々な場面や将来の進路について、自らの目標を設定することができていない。
		集団や学校、地域・社会の課題を自ら見出し、コミュニケーションを取りながらその解決のために協働して考察し、解決策を提案・実行している。	集団や学校、地域・社会の課題の解決に向けて、コミュニケーションを取りながら他者と協働して取り組んでいる。	他者の存在を認め、自らコミュニケーションをとろうとしている。	他者の存在を認めず、コミュニケーションをとることができていない。

※「志」とは、「将来の目標」の他、「思いやりの心」、「あきらめない気持ち」、「心を集中すること」、「感謝する気持ち」等を意味します。

表2 安古市高等学校全体で育成すべき資質・能力のマスターループブリック抜粋

4 「仰高ゼミ」と学びのキャリア

毎週水曜日の6限目を仰高ゼミ、7限目をLHRと設定し、全学年で統一して実施している。このため、校外学習実施のために仰高ゼミを2時間連続で実施したり、他学年の行事に合わせて6・7校時を入れ換えたりするなど、柔軟な対応を可能としている。

「仰高ゼミ」は3年間の学びを、ゴールである「安古市スタンダード」の実現につなぐべく、「生徒を主語（主役）」にして「線（ストーリー）」で結び、計画されている（表3）。自己と向き合うための「仲間づくり」、外部人材との交流の中で、ものの見方・考え方を深める「通学地域の学習フィールド化」、個々が学びをつなげ深化させる「ふりかえりの習慣化」を、「探究の時間」にとどめることなく各学習活動で横断的に設定することにつながっている。また、1学年で実施する「毘沙門台クエスト」をはじめ、地元地域運営組織であるLMO（Local Management Organization）毘沙門台と連携協定を締結し、様々な場面でご協力をいただき、「社会実装」へとつなげている。

2学年では「知の冒険」として、グループ探究を実施し、発表会としてパネルディスカッション形式での報告を行うことで、目標となる資質・能力の育成を図っている。

表3 仰高ゼミ テーマ一覧

年次	テーマ	目標
1 学年	「自己探究」 「毘沙門台クエスト」	● 自己や他者理解を通して、自己の生き方やあり方を考える。 ● 共通了解志向型対話など思考の「型」を活用する。 ● 探究活動を通して、地域課題を知り、解決策を提案することで、実行する力を身に付ける。
2 学年	「知の冒険」	● 課題及び課題に対する仮説を設定し、情報を収集・整理・分析・総合し、結論を見出す過程で求められる資質・能力の涵養・育成を図る。 ● 探究の成果を他者に伝える活動を通して、コミュニケーションから得られた新たな知見・疑問を再確認、再検証する力を身に付ける。
3 学年	「未来の学び計画書」 「自己PR」	● 探究活動における学びの振り返り。 ● これまでの学びとこれからの学びの連結。

5 未来の学びを結ぶ

3年生の仰高ゼミでは、探究活動や進路LHRを振り返り、「未来の学び計画書」と「自己PR」について取り組む。これまでの探究活動からの学びを、将来の学びや自己のキャリアを考える力へと昇華させることを目指す。本校のキャリア教育全体計画においても、アウトカム評価の項目に「作成した志望理由書等から、生徒がいかに現代の諸課題を追究し、課題解決に向けて構想して、自己とのつながりを見出しているかを読み取る。」ことを設定するなど、生徒自身が3年間を通してどのような変化（成長）をすることができたのかを考え、整理し、次の学びへと向かう時間となっている。

（1）2 学年進路LHR

2学年の進路LHRでは、実社会での産学官の取組みについて学び、生徒の興味関心の幅を広げることや、社会課題への多様な関わり方について学ぶ。また、3学期には、志望理由書の作成を行う。生徒一人一人が、自分がなぜその大学・学部・学科に行きたいのかを明確に「可視化（ことば化・みえる化）」し、受験生としての意識を高めることを目指すとともに、自己についてのメタ認知を高めることを目指す。

（2）未来の学び計画書

「知の冒険」で探究したことと関連付け、自分が取組みたい社会の課題とその解決策について探究する。また、その課題を解決するために大学等で学びたい事や探究したいことについてまとめ、1学期三者懇談で保護者に向けてプレゼンテーションを行う。この活動では、生徒個人がこれまでの取組みの振り返りと整理を行い、発表資料

としてまとめることで、大学へ提出する志望理由書や学修計画書の準備とすることもできる。また、生徒のこれまでの自分の学びのキャリアについてふり返り、学びのキャリアの価値を高める活動を目指している。

(3) 自己PR

リフレーミングやこれまでの経験を振り返り、生徒が自身のセールスポイントを認識する。また、セールスポイントの裏付けについて具体的にまとめることで、客観的な視点から自身のセールスポイントを将来どのように活かすかを考え、表現する。自らの成長を客観視し表現する活動を、3年間の探究活動の結びとすることで、これまで気づけなかった自身の新たな面を発見することや、これまでの学びのキャリアに自信を持つことを目指す。また、社会人講師を招聘して自己PR発表会（希望者対象）を実施し、評価をしていただいている。単に総合型選抜等の面接対策ということではなく、生徒の学びのキャリアの価値を、学校外の視点から高めていただく試みである。

(4) 大学提出書類等の事例

「未来の学び計画書」および「自己PR」の生徒事例と、実際に大学へ提出した内容の一部を掲載する。本生徒は山口大学経済学部へ総合型入試で合格を果たしている。

「未来の学び計画書」スライド(抜粋)

大学で学ぶこと
国際社会や地域社会の現実的課題に応えられるようになるため、山口大学の伝統ある少人数教育ゼミナールなどで幅広い人間形成を行い、実践的に使える能力を培う。

- ・社会に溢れる数字の意味を知り、データ分析力を磨く
- ・データサイエンスを学び、地域が抱える課題を証拠にもとづき、客観的に分析ができるようになる

とりたい資格

- ・簿記
企業の営業取引や経営活動を帳簿に記録する技術
企業の経営成績や財務状況 など

志望理由書(抜粋)

が起きている。このような労働市場のバランスの不均衡は重要な課題である。私はこの課題にアプローチするために、将来は労働市場の改善に貢献していきたい。私の将来の夢を実現していくための環境として、貴学の経営学と企業法務コースでは経済と経営、さらに法律について総合的に学びながら、労働環境上の課題に対して法律の視点で考えていくことが出来る点に強い興味を抱いた。また、地域の事業に積極的に関わりながら、地域特有の労働環境について学んでいきたい。例えば、山口県内企業や地域企業、山口県内企業などでの運営サポート等をする機会があることも貴学のオープンキャンパスを通して知ることができた。こういった機会を活かし、地域住民と交流することによって、より地域に根ざした労働の改善策について考えを深めることができると考える。

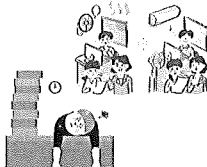
「自己PR」発表スライド(抜粋)

③将来への活かし方

労働環境問題について

- ・賃金格差
- ・キャリア形成機会の不足
- ・長時間労働

知らない課題がたくさんある



話しかけることをいかして多くの人から労働に関する問題を効率的に集める

6 本校の指導の強みと課題

本校の進路指導の強みは、サクセスストーリーを通して、目指す生徒像の実現のため、3年間の一貫した指導体制の実施である。その結果、時期に応じた生徒への働きかけを逃さず、学年団が目線をそろえることで、「安古市高校の進路指導」を、教員一人一人が自信を持って行うことができる。

一方で今後の課題は、評価の在り方である。「安古市高校の進路指導」が、生徒がキャリアについての視点を持ち、軌道に乗りつつある「安古市高校の探究活動」と、生徒の「未来の学び」を結び、『こうしたい』『こうなりたい』という学びの動機を高めるものであることを確認できる評価を、教育研究部や学年と連携して実施することが課題である。そして、その評価が、「安古市高校の進路指導」に取り組み続ける教員のエネルギーとなる評価（持続可能な取組みとするための評価）であることが重要である。また、「安古市高校の進路指導」を通して、先生方が繋いできた生徒への思いを受け継いでいくことも、重要な課題だと考える。

「できることから少しずつ」

山口県立宇部高等学校 教諭 林 克佳

1 はじめに

本校では、ほぼ全ての生徒が四年制大学への進学を志望しており、そのうち95%以上が国公立大学を志望している。近年は、6割を超える生徒が国公立大学に合格し、私立大学も含めると約8割が四年制大学に進学し、残りの約2割は予備校等に入学している。

今回、「一人一台端末環境での進学指導」というテーマで事例発表をさせていただくことになったが、率直に言えば、「一人一台端末環境での」という前提には、いまだ戸惑いを感じているのが実情である。ICT環境の変化への対応で精一杯であり、私自身が先進的な取組を実践しているとは言い難い。ただ、一人一台端末の利用を目的化するのではなく、一人一台端末の活用により従来の環境を改善できそうなことがあれば、少しずつ挑戦していこうという方針で、日頃の進路指導業務について見直しを行ってきた。本発表では、先進的な事例を紹介することはできないが、日々の実践の中で得られた気づきや課題を発表することで、他校の先生方と悩みを共有し、事後に感想や助言をいただける機会となることを期待している。

2 本校におけるICT整備状況と一人一台端末活用状況

コロナ禍をきっかけとする「GIGAスクール構想」によって、本校では令和2年12月に生徒一人ひとりにタブレットが貸与された。また、令和4年度からは県の教育環境デジタル化推進校として、学習指導や校務におけるMicrosoft社製のTeamsの活用が推進された。ネットワーク環境もフルクラウド化され、新たな授業実践が可能となった。実際の活用例としては、Excelで作成したデジタルレポートのTeams上での提出、実験後の感想や考察をMicrosoft Formsで回答させる取組が挙げられる。また、ホームプロジェクト等の場面で発表用スライドの作成が日常的に行われており、生徒の表現力や作成能力の向上が見られる。加えて、生徒・教員間、教員同士の連絡・相談においてもチャット機能が多用されるようになっており、生徒が教員に相談しやすくなったとの声も聞かれるようになった。

3 進路指導部としての一人一台端末活用例

(1) 進路希望・学習量調査のMicrosoft Formsによる実施

本校では進路希望・学習量調査として、生徒の志望進路系統（文理、国公立私立等、学部等）、志望大学、平日・休日の学習時間等について、年3回調査している。一人一台端末環境が整備される前は、紙媒体で実施していた。紙媒体による調査の利点は、SHRなど短時間でアンケートを実施し、一斉に質問紙を回収できることである。一方で、データ集計を行うために、Excelシートなどに生徒の回答を教員が手入力する必要があり、各クラスの担任・副担任に多大な負担をかけていたことが課題であった。一人一台端末環境が整備されたことを受け、令和3年度よりGoogle フォームを用いた調査に移行した。移行に際して課題となったのは、志望校の入力方法である。「山口大」「山大」のような、生徒による表記の揺れは従来からあったが、模試実施業者が提供するシステムを利用して教員が入力することで表記の揺れは解消されており、また、システムの利用により大学コード番号を用いた分析も可能になっていった。教員の負担軽減という観点から、フォーム移行後は、生徒が入力する段階で、大学コードも入力させることにした。大学コード番号をまとめたPDF形式のファイルを生徒に提示し、志望校の大学コードを生徒各自が確認したうえで、入力させることとした。コード番号の入力ミスの可能性もあるため、コード番号とともに、大学・学部・学科名も入力させることにした。セキュリティレベルを高めるため、コミュニケーション用ブ

ラットフォームの中心が、Google classroomからMicrosoft Teamsへ移行したことに伴い、令和5年度から調査もGoogle フォームから、Microsoft Formsに移行することとなった。

この進路希望・学習量調査は全員入力を促すために、担任に入力状況のチェックを依頼している。朝礼等における担任による周知と、生徒たちが調査に慣れてきたおかげで、ほとんどの生徒が期限内に入力する。よって、担任のチェック回数は数回で終わることがほとんどである。しかし、生徒指導部等他の分掌も、全員入力を求める同様のアンケートを実施しているため、担任は頻繁にこのような入力確認を行っており、担任の負担感は依然として存在する。一方で、紙媒体で実施した場合、それぞれのアンケートについて担任・副担任がExcelシートに回答を入力しなければならなかったことを考えれば、その手間がなくなったということは大きなメリットである。ただ、手間ではあったが、担任がExcelシートに入力する際に、回答を見ながら様々な気づきを得ていたということは生徒把握において重要な意味をもっていた。入力結果は学年の進路指導担当が表にまとめて担任に渡しているが、表から得られる気づきは入力の手間から得られるものよりも限定的であるだろう。大学コードの入力ミスの有無については、Excelシートで関数を用いてチェックすることとしているが、ミスの発生率は数%程度である。

(2) 希望者による進路関係行事のMicrosoft Formsによる申込受付

本校では、医学部医学科説明会等の希望者を対象とした進路行事を多数実施している。進路行事の申込受付については、従来、進路資料室に申込用紙と受付箱を設けることで行っていたが、この場合、生徒の情報（学年・組・番号・氏名等）は担当者が入力しなければならなかった。そのため、近年はMicrosoft Formsによる申込受付とし、申込フォームへのアクセス用二次元コードを記載したチラシを教室に掲示するとともに、全校生徒に公開されているMicrosoft Teamsの共有チームにも案内を投稿している。申込方法の変更による、参加者数の増減は見られていない。ただし、申込をしたつもりであったが送信できていなかったと申し出る生徒や、二重申込をする生徒が散見されている。

今回のテーマから少しずれるものの、保護者を対象とした進路講演会の参加希望調査も今年度からMicrosoft Formsを利用して行った。申込フォームへのアクセス用二次元コードを記載した案内文書を印刷し、生徒を通じて全家庭へ配付した。保護者を対象とした講演会は例年、約半数の保護者が参加する重要な行事であり、今年度も多くの保護者に参加を促したいと考えたこと、また、昨年までの紙媒体での参加希望調査においても出席・欠席いずれの希望でも調査票の提出を求めていることから、今回も全員の回答を依頼した。

5月23日に文書を配付し、回答期限を6月10日としたところ、期限までに約84%の保護者から回答を得た。期限後も未回答の保護者に生徒を通じて担任が回答を促し続けたことで、結局、約96%の保護者から回答を得ることができたが、これに負担を感じた担任も多かったものと思われる。参加・不参加のみを問う調査であれば、その結果をExcelシートに入力するとしても大きな手間ではないし、何度もフォームを開き入力状況を確認するよりも、紙の方がすぐに提出状況が分かる。よって、今回のように項目が少ない調査は紙媒体で実施する方がよいと考える。また、保護者による入力の場合、組・番号等の誤入力为数%程度起こり、訂正を行った担当者にはそれなりの負担となった。なお、調査方法の変更は、参加者の増減には大きな影響を与えなかった。

(3) オープンキャンパス情報、大学紹介パンフレットの提供

全国の大学から送付されるオープンキャンパスや高校生対象イベントの案内は、生徒の学びの動機づけにつながる有意義な情報である。しかし、掲示スペースに限りがあるため、全てを紹介することが困難であった。そこで、チラシ等をPDF形式のファイルに変換し、全校生徒に公開されているMicrosoft Teamsの共有チーム内の共有資料フォルダ内に保存することで、全校生徒が閲覧可能な環境を整備している。各ファイルの名称の冒頭には大学コード番号を付しており、昇順に並べ替えることで地理

的に北に位置する大学から順に表示されるように工夫している。全国の大学のオープンキャンパス情報を一度に見ることができるため、非常に利便性が高いものとなっていると考えるが、近隣の大学でも十数回程度の閲覧回数となっており、まだまだ周知が必要であると考えている。

また、各大学から送付されるパンフレットを学部ごとにスキャンしてPDF形式に変換したファイルも、上記の共有フォルダ内に保存している。学部系統ごとに分類して保存することで、同系統内での大学比較が可能となっている。今年度、1学年は夏季休業の課題として、学部調べを行うことになっているが、ワークシートの中で共有フォルダへのアクセス方法を紹介し、活用を促すこととしている。

なお、これらの資料は生徒用Teamsに保存されているため、保護者にはアクセスする権限はない。保護者対象の進路講演会において、生徒のタブレットを使用して親子でこれらのファイルを活用していただくよう紹介したが、保護者が所有する電子機器からアクセスを希望する声が寄せられた。

(4) 共通テスト形式模試の自己採点

令和6年1月に実施された共通テスト後の自己採点から、外部業者による共通テスト自己採点集計サービスもデジタル化された。従来は、模擬試験においても紙のシートを用いて自己採点を行っていたが、本番ではタブレットに自らが選択した解答を入力するという全く違ったやり方で行うことになるため、模擬試験における自己採点が本番に直結しないという課題があった。

そのため、今年度から模試実施業者が提供している進学情報・学習支援サイト内の本番同様のシステムを利用して自己採点を行うことにした。このシステムを活用した場合、生徒が問題冊子から自分自身の解答番号を確認してタブレット上に入力するだけで、システムが正誤判定を行い、合計得点も自動計算される。合計点を手計算する必要のある従来の紙媒体による自己採点よりも実際の得点とのずれは少なくなるかと思われたが、ほとんどの生徒について実際の得点と大きなずれが生じていることが分かった。このミスの多さの原因は、生徒が自らの解答を問題冊子に分かりやすく記録していないなどの、自己採点を紙で行うかどうかといったことよりも基本的なところにあると推測され、このことをもって自己採点をWEB上で行うことの是非は判断できないのではないかと考えている。ただ、WEB上で行ったことで各自の自己採点結果と実際の得点を比較しやすくなり、自己採点ミスが多いという課題に気づけたことは収穫であり、今後は担任や学年団と連携し、自己採点指導の充実を図っていく予定である。

(5) 外部模試のデジタル化への対応

近年、外部模試における志望校や生徒情報登録のデジタル化が進んでいたが、今年度から解答解説をPDF形式のファイルとしてWEB上で提供する模試実施業者も出てきた。紙媒体での提供も選択できるが、この場合はWEB上での提供を選択する場合と比べて、数百円ほど受験料が高くなる。来年度からは別の模試実施業者でも同様の対応が行われる。昨年度、進路指導部で協議をし、物価高が続いている現状でさらなる受験料負担は避けるべきだと考えたことと、近年のデジタル化の流れの中で数年後には紙媒体という選択肢もなくなるであろうということから、今年度からWEB上での解答解説提供を選択することとした。今年度、これまでに2回、該当の模試が実施された。解答解説のWEB上での提供により、生徒の模擬試験の復習にどのような影響が生じているかを調査するため、アンケートをMicrosoft Formsで作成し、7月29日から31日にかけて実施した。生徒からの回答結果は次のようなものであった。

① WEB上の解答解説の閲覧回数について

	5回以上 閲覧した	2～4回 閲覧した	1回しか 見ていない	1度も 見ていない
6月上旬実施の共通 テスト模試について	15%	54%	25%	7%
7月上旬実施の記述 模試について	10%	55%	29%	7%

② 解答解説が冊子配付からWEB上での閲覧に変更になったことで、復習しやすくなったか。

復習しやすくなったと思う・・・14%

復習しにくくなったと思う・・・53%

どちらとも言えない……………33%

③ 解答解説を紙媒体で配付してほしいと思う教科はどれか（複数回答可）。

数学	英語	理科	国語	地歴公民	情報	無し
64%	59%	53%	40%	39%	28%	21%

④ 今後、解答解説の冊子配付を希望するか、WEB上での閲覧を希望するか。

冊子配付を希望する……………77%

WEB上での閲覧を希望する…23%

以上のように、多くの生徒がWEB上での解答閲覧になったことで復習がしにくくなったと感じている。WEB上での解答閲覧になったことのメリット、デメリットについても質問したところ、メリットとして、場所を選ばず復習できることや、管理がしやすくなり紛失する可能性が低くなったことを挙げる生徒がいた。一方で、デメリットとして、解答解説に書き込みをしにくいために理解を深めにくいこと、タブレットやパソコンを起動してサイトにログインするのが手間であること、インターネット環境がないと利用できないこと、スマートフォンやタブレットでは画面が小さく見づらいことなどを挙げる生徒が多くみられた。WEB上の解答解説の閲覧も経験したうえで、今後、冊子の配付を希望する生徒が約8割となった事実は大きく、1回につき数百円ほど受験料負担が増えることとのバランスを考えながら、進路指導部としてもどちらがよいか検討を進めていきたい。

（6）大学入学共通テストの出願

手続きが初めて電子化される令和8年度大学入学共通テストの出願が9月16日から実施される。それに先立ち、6月20日に実施要項等が発表された。その概要について、翌21日に開催された保護者向けの進路講演会で説明をした。7月1日から出願手続き等に必要マイページの作成が可能になったことを受け、進路指導部では、今年度からの変更点とともに、マイページの作成手順を紙にまとめた。これをもとに7月18日のLHRで各担任から生徒に説明を行い、夏休み中にマイページを作成するよう指示をした。また、7月下旬に実施された三者面談において、作成できたかどうか確認することとしていたが、7月末の段階では22%しか完了していなかった。完了した生徒のほとんどは「簡単であった」と回答していたが、期限直前まで行動しない生徒が多いため、時間を確保して一斉に実施する方が効果的であったと考えている。出願については、手続き開始日である9月16日にLHRの時間を確保し、その時間内で受験料の決済手続きの手前まで行う予定である。決済手続きについては各家庭で実施してもらう予定である。

4 実践から見えてきた課題

I C T環境の変化には教員も十分に対応しきれていないが、生徒たちも一人一台端末環境に十分に適応しきれていない状況が見られる。模擬試験の解答解説は紙媒体の方がよいと回答する生徒が多いということがその代表的な例である。今後、他の模試実施業者もWEB上での解答解説提供になるが、解答解説を見る度に各業者のサイトにログインする必要がある。共通テスト出願サイトも含めて、複数のログインIDやパスワードの管理が必要となり、苦慮している生徒も多い。また、フォームを用いたアンケートが他分掌も含めて頻繁に実施されるが、フォームへのリンクが複数箇所に分散して記載されていたり、同じ場所に投稿されていても、新しい投稿によって過去の内容が埋もれてしまったりするため、生徒自身、どのアンケートに答えたのか把握しにくくなることもある。保護者についてもメールや文書等で依頼されたアンケートに回答したかどうか、また出席・欠席のいずれで回答したか分からなくなりやすいということもあるようである。

このような情報が一元化できる生徒個人のポータルサイトが整備され、そこに保護者もログインできるようになると、以上のような問題は解決に近づくのではないかと考えているが、日々の業務の中で、一つの学校でこのようなサイトを作り上げるのは非現実的ではないかとも考えている。

5 おわりに

本校の実践について紹介してきたが、どの取組においても改善の余地があり、本校進路指導部として、急速に整備された一人一台端末環境を十分に活用しているとは言えないと感じている。一方で、I C Tの活用が目的化してしまうことなく、教育の本質を見失わない姿勢も重要であると考えている。生徒一人ひとりの状況を丁寧に見ながら、できることから少しずつ一人一台端末環境を活用していきたいと考えている。今後も、現場での実践を通じて得られた気づきや課題を共有しながら、未来を生きる生徒たちにとって最適な進学指導の在り方を模索していきたい。

「自律分散型進路指導の進化」 ～生徒の「will」を育み、学びの主体性を引き出すDX戦略～

島根県立隠岐島前高等学校 教諭 飯野 卓

1 はじめに

(1) 本校の沿革

昭和30年度 島根県立隠岐高等学校島前分校定時制として開校
昭和40年度 島根県立隠岐島前高等学校と改称
昭和51年度 レスリング部 全国高校総体（新潟）初出場
平成21年度 平成21年度優れた教育活動受賞
平成27年度 文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）に認定
令和4年度 地域社会学科として「地域共創科」を新設、失敗の日設定
令和7年度 創立70周年を迎える

(2) 学校概要

本校は隠岐島前地域唯一の高等学校であり、地域にとって存在意義は大きい。平成20年度、生徒数の減少によって全校で3クラスとなり、廃校の危機を迎えた。そこで学校・行政・地域が協働して高校魅力化プロジェクトに取り組み、離島・中山間地域では異例となる生徒数の倍増を実現した。現在は1学年2クラスを維持し、生徒数は現在146名であり、島内生59名、島外生87名と島外の生徒も積極的に入学している。また、令和4年度より地域共創科が新設され、第2学年より普通科と地域共創科に分かれる。

本校は「グローバル・ローカルに代表される価値観の違いを超えて協働し、広い視野で考えながら、身近な課題に粘り強く向き合い、新たな価値の共創に挑戦しようとする人」「どこにいてもふるさとを思いながら、自分自身の強みや根差す地域特性を活かして活躍できる人」を目指している（図1参照）。そのため、本校では探究学習を積極的に推進しており、課題解決型の探究学習をはじめ、令和4年度に新設された地域共創科では、教科学習や「総合的な探究の時間」による探究的な学びとあわせて、地域でのより実践的・実地的な学びを展開することで未来に向けた新たな価値を創造・共創することを目標としている。また、韓国研修をはじめ、長期休暇を利用したブータン探究などグローバルにも挑戦できる教育プログラムが豊富にある。

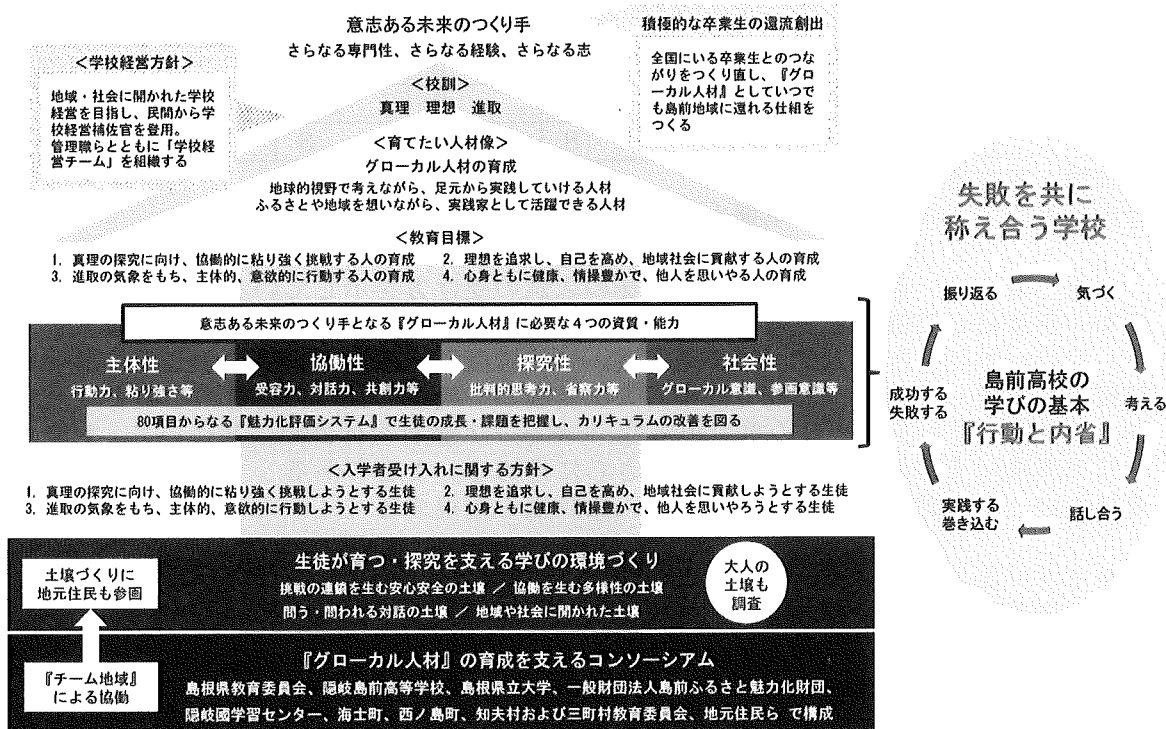


図1 隠岐島前高校のグランドデザイン

2 本校の進路状況

表1 本校の進路概況

進路			R 2	R 3	R4	R5	R6	
			普通科				普通科	地域共創科
進	大 学	国 立 大 学	3 (1)	6 (1)	3	3	4	2
		公 立 大 学	5 (1)	5 (1)	3	5	4	1
		私 立 大 学	10	8 (1)	20	37	15	19
	専 門 職 大 学		3	1	0	3	0	0
	短 期 大 学	公 立 短 期 大 学	0	0	0	1	0	0
		私 立 短 期 大 学	3	0	3	1	1	0
	専 門 学 校 等	医 療 系 専 門 学 校	2	3 (1)	4	4	2	0
		そ の 他 の 専 門 学 校	9	5	14	6	2	2
		予 備 校 等	5	7	1	4	6	1
		そ の 他 の 学 校	0	2	0	1	0	0
学	海 外 の 大 学						0	1
	小 計		40 (2)	37 (4)	48	65	34	26
	就 職	公 務 員	2	3	1	0	0	0
		一 般 事 業 所	6	5	1	3	1	2
		自 営 ・ そ の 他	2	1	0	5	0	0
小 計		10	9	2	8	1	2	
計			50 (2)	46 (4)	50	73	35	28

※ () は過年度生

上記の表1は、過去5年間の本校の進路概況である（合格実績であり、複数校に合格した生徒も含む）。多くの生徒が四年制大学へ進学しており、この4年間で私立大学の合格者数が急増している。また、令和6年度は海外の大学に進学した生徒を輩出した。

表2 本校生徒の入試の形態

卒業年度		R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6
卒業生数		6 1	4 8	4 2	5 4	5 9	5 0
内訳	総合型	2 1	1 6	5	1 9	2 6	1 4
	学校推薦型	1 7	5	8	1 9	1 2	2 2
	一般	1 1	8	1 1	3	6	2

※就職、未定者は除く

※国公立大学、私立大学、短期大学、専門学校の受験

上記の表2は、過去6年間の本校生徒の入試の受け方を示している。令和元年度から令和3年度は一般選抜を受験した生徒も一定数見られたが、令和4年度より減少している。その一方で、年内入試（総合型選抜・学校推薦型選抜※）を受験する生徒が令和4年度より急増しており、本校では年内入試受験が一般化されつつある。このような状況下で、本校のキャリア教育の重点施策は、「キャリア教育全体計画に基づいて、生徒のキャリア形成の支援をして、入試対策をさらに進める」ことである。

※従来の一般入試と異なり、総合的な人物評価を重視する

2 キャリア伴走体制について

(1) 本校のキャリア教育の現状

先述したとおり、年内入試を受験する生徒が急増しており、担任一人で指導や受験準備を対応するには負担感が大きい。昨年度、地域共創科では生徒の探究学習を伴走する教職員がそのままキャリア伴走を担当した。その結果、担任の負担は軽減されるとともに、探究学習とキャリアの接続が図られた事例も見られた。一方で、担当教職員が自分の長所を生かした進路指導ができていなかった事例や、教職経験の差が出て伴走に困る教員も一定数存在した。

(2) キャリア伴走体制の構築

上記のことを踏まえ、今年度より新たなキャリア伴走体制の仕組みを構築した。右図がその体制図である。

本校のキャリア伴走体制は、生徒2～3人に対して1人のチューター教員を配置し、またそのチューター教員を支援するサポート教員も配置した。加えて、公立塾である「隠岐国学習センター」（以下：学習センター）のスタッフと連携しながら、三位一体で伴走する仕組みを整えた。担任はクラス全体を把握・運営することに注力でき、自律分散的な伴走支援が利点である。それぞれの役割は以下のとおりである。

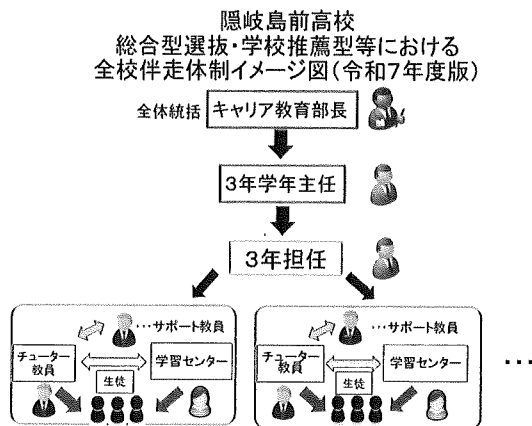


図2 隠岐島前高校におけるキャリア伴走体制

チューター教員	生徒と直接面談等を行い、主となって志望先を一緒に決めていく伴走教員
サポート教員	チューター教員から相談があった場合に助言をする
3年担任	年度当初や検討会後の面談をおこなう。クラス全体の生徒の進捗状況を把握する。調査書の作成をおこなう。
学習センタースタッフ	壁打ち（生徒の話を聞き、考えを整理）をとおして、生徒の進路に関する思いや考えを具体化し、進路選択の幅を拡げる。

チューター教員と生徒の組合せは第2学年3学期時点の生徒の「進路志望」「将来像」と、教職員の「専門」「大学（院）研究テーマ」「興味・関心」を照合させて決定した。そして、第3学年の総合的な探究の時間で探究学習の伴走する生徒と教職員を一致させ、探究活動とキャリア形成の接続の強化を図っている。

3 キャリア伴走体制の具体的取組

(1) キャリア伴走会の実施

1週間に1回、キャリア教育部長、第3学年主任、第3学年正担任、サポート教員、学習センタースタッフが参集し、進路決定までのスケジュールの共通理解や伴走においての困りごとを協議している。

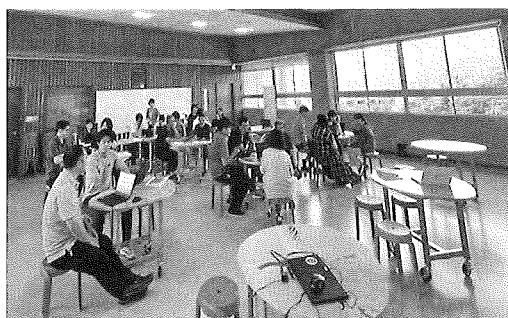


写真1 教職員による共有の様子

(2) キャリア伴走研修会の実施

全教職員や学習センタースタッフが一堂に
会し、キャリア伴走のあり方についての研修
や生徒の進捗状況の共有を図っている。

(3) キャリア伴走マニュアルの作成

進路指導の経験が少ない教職員も多い中で、キャリア教育のあり方、伴走の方法、志望理由書や面接の対策などを記し、教職員全体の共通理解を図ることを目的に作成した。

(4) Google chat を活用した連絡・指導

各生徒一人に対して chat を作成し、その中に生徒、チューター教員、サポート教員、学習センタースタッフがメンバーとして入り、学校での活動時間外においても指導ができる仕組みを整えた。また、進捗を可視化（後述）してチーム内で共有することも利点である。

(5) 面談結果をスプレッドシートで共有

全教職員および学習センタースタッフが編集・閲覧ができ、進捗状況が把握できる。第3学年正担任も生徒個々の進捗状況を把握して、クラス全体の運営に活かせるようにしている。加えて、記録を残すことで生徒の変化や成長を見取ることができるのも利点といえる。

(6) スプレッドシートによるキャリアプランシートの作成

[illegible]

図3 キャリアプランシート

本校ではキャリアプラン検討会（いわゆる進路検討会）において、生徒が作成したキャリアプランシートを用いて検討をしている。このシートは、生徒の自分の将来像・生き方・進路などが反映される。また、過去の経験や探究活動で身につけたことも記入できるようになっており、年内入試を見据えて自身の経験の振り返りをおこなえる工夫を加えている。チューター教員と一緒に作成している生徒もあり、自分の想いや考えを共有できる一つの材料となっている。そして、本校は先述したとおり、遠方の保護者も多くいるので、classiを活用して保護者の考えや意見を収集し、キャリアプランシートに反映している。

（７）Benesse 教材等の活用

① Compass の活用

全教職員が志望校の決定や年内入試の対応の見極めなどをする際に、Compass を用いて面談をおこなっている。

② 志望理由書の添削

第１・２学年で「小論文・志望理由書ナビ」を活用して、志望理由書作成の練習を実施している。また令和６年度より、キャリアガイダンスで生徒が作成した志望理由書の課題点を全体で共有し、生徒個々で書き直しをおこなうことで、より良い志望理由書が作成できる工夫を加えた。そして、第３学年の夏頃から本格的に志望理由書の指導をおこなう際に、遠方の生徒も多く在籍しているため、Google ドキュメントを活用して夏季休業中にも志望理由書の添削をおこなっている。

（８）キャリアポータルサイトの活用

本校では、校内書類の電子化、志望校や就職先の決定に役立つサイト、受験対策のマニュアルや動画などをキャリアポータルサイトに集約している。このサイトは、本校独自の校内サイト「みんなで作る島前サイト」（本校教職員・生徒のみ閲覧可能）に掲載しており、生徒はいつでも閲覧可能である。これによって、反転学習ができるようにしている。



写真２ キャリアポータルサイト

４ まとめ

本校では、年内入試受験者の増加に伴い、担任一人が丸抱えせずに生徒の進路指導ができる仕組みを検討してきた。それが全校キャリア伴走体制であり、若手教員と中堅・ベテラン教員の力を結集しつつ、伴走では対面とＩＣＴによるハイブリッドな指導によって生徒の進路実現の効果的な支援のあり方について模索中である。一方で、従来の第３学年正担任が主導するあり方とは異なる形式であるため、本校のキャリア伴走体制における第３学年正担任の立ち位置などには課題がある。教職員・生徒の意見を共有しながら、今後も引き続き改善を加え、より良いキャリア伴走のあり方を検討していきたい。

「高い志」育む進路指導

岡山県立岡山朝日高等学校 指導教諭 田中 晴美

1 はじめに

岡山朝日高校は明治7年創立、151年目を迎えた全日制普通科高校である。本校には校訓というものが無く、教育方針の「自主自律・自重互敬・のびのびときまりよく」という言葉を、生徒に示している。もう少し開くと、「自主自律を重んじ、自由を尊重する態度を身につけること」、「自重互敬の精神を持ち、教養豊かで品性の立派な人物たること」、「のびのびときまりよく生活し、集中・継続・協力して学び続ける人物たること」、である。3年間を通して、地域社会や国際社会を牽引するリーダーとして、その発展に貢献する人材の育成を目指している。授業は週31単位55分授業である。新しい教育課程を組むに当たり、校内で議論を尽くし、教材を深くじっくりやるためには55分であることが必要ということを決着した。

今大会のテーマ『時代の変化を恐れず、生き抜く力を育む進路指導』と、『進学に結びつく基礎学力定着の取り組み』という分科会テーマについて、朝日高校で行われている進路指導の流れに即して説明する。朝日高校進路指導課の「哲学とシステム」を紹介することになるが、おそらくはその中にテーマに沿った内容も含まれると考える。

2 進路指導課基本姿勢

進路指導の哲学の中心は、「志」を育てるということである。(資料①) もちろん具体的な志望校を最終的には書かせて、何をどう勉強するのか方向性を示して指導していくのだが、まずは、「どう生きたいのか」「どのような生き方に憧れるのか」ということを考えさせる。いきなり考えを書かせたり、アンケートを受けさせたりとかはせず、授業や面談や学校行事、部活・OBとの対話・ありとあらゆる場面で刺激を受ける機会を設け、個々の生徒の内面に醸成してくるように仕向ける。

年度当初の職員会議では毎年、進路指導課として基本姿勢8項目を先生方に示している。代々の進路課長は誰一人手を加えずにきた。普遍的な内容であると共に、岡山朝日高校進路指導課として受け継いでいくべき哲学である。以下、順に説明する。

① 「世界」で活躍できる有為な人材を目標に、高い志を持つ生徒を育成する。

各学年の学年目標には、高い志、教養、品性、この三つの言葉が必ず入っている。進路指導課に限らず全ての教員がこの言葉を発する。課として重要視しているのは、進路講演会である。年間行事計画(資料②)の囲みのある講演会が外部の講師をお招きしたり、修学旅行などこちらから出向いたりして行われている。これらは時程外の「総合的探求の時間」の位置づけになる。本物に触れさせる、がキーワードで、卒業までにたくさんの講演会があるが、一番大切にしているのが1年生6月の講演会である。現在は筑波大学の山海嘉之教授、世界的科学者の先生に学問の楽しさ、社会貢献、異分野連携などなどについてお話しいただいている。教員とはまた別の口で生徒の気持ちを抱きかかっている。世界へ誘っていただいております、「私の後に続いて欲しい」というメッセージは、毎年生徒の目を輝かせている。

② 教育における「自主自律」を重んじる。生徒の成長を辛抱強く待つ。

講演会後の座談会の出欠もそうだが、とにかく自分で決めさせる。待つ指導。教えすぎない。学習実態調査では自分の生活スタイルを客観視させつつ、こうするのが良いというアドバイスはするが、結局は自分で学習の質を高めるスタイルを見つけ出すまで待つ。課題も毎週は出さないで、大まかに指示しておいて定期考査の時に提出をさせる。土曜日に行われるハイレベル講座も自分でエントリーして出席する。同時にレベルアップ講座も実施し、基礎力を強化する必要のある生徒達の講座も展開してい

る。集団づくりが目標だが、土曜日に出てきている生徒達が、普段のクラスに帰ると良い雰囲気を作り出してくれる。

- ③ 基礎知識の習得の手順を訓練し、そこから発展的学習につなげる。知的なスリルを味わわせる教科指導を行う。

朝日高校ではわかりやすく質の高いスリリングな授業をすることが必須である。年齢・経験を問わず力のない者は辛い、完全オリジナルの実力考査の作問が鍛えてくれる。生徒指導も進路指導も授業で信頼を得なければならないことである。生徒ひとり一人を心から敬愛し、彼らにできるだけ高い壁を示そうと努力している。

- ④ 「入れる大学」でなく「入るべき大学」に合格する学力を涵養することを目指す。

「入りたい大学」というのは、生徒の主観が強く、「入れる大学」というのは、自分で自分の力の上限を定めてしまっている。自らの「志」に照らして、親や学校の先生や先輩の話や塾の先生など、周りの客観的な意見もふまえて、自らの学ぶべき、進むべき大学はここであると定めた大学を志望せよと言い、また、自ら志望することで学力も伸びていく。

年間行事計画（資料②）にあるガイダンスや部活動講演会というのは、大学生大学院生に語ってもらうガイダンスである。年の近い、顔見知りの先輩のいる回に参加すると勇気が得られ、参加している同級生の顔ぶれを眺めながら、仲間意識やライバル心を持つようになる。更に「受験記」、いわゆる合格体験記は、同じ中学校出身だったり同じ部活の所属だったりする先輩の文章によって、より身近に大学を感じる契機にもなる。

- ⑤ 校内実力の「素点」に基づいて進路指導を行う。得点に現れない生徒の学力をも把握し、具体的な助言を行う。

朝日高校では実力考査の素点に基づいて進路指導をしている。1・2年生は年間3回、3年・補習科は年間4回行っている。年間行事計画（資料②）に示してある。3年生34回の実力考査の平均点と前年度大学入試結果をふまえて、毎年「基準表」という冊子を作成し、全生徒に配布している。実力考査に合わせて行う志望校調査では、基準点と同時に配点も調べて提出させるので、生徒たちは自分の志望大学に何点足りないとか、どの教科をどのように取り組むのかとか、担任や教科担任と相談をすることになる。学習実態調査から見える学習の教科バランスについてもそこでアドバイスをする。

実力考査は朝日の進路指導の生命線であり、内容はもちろん、基準表がきちんと機能するように平均点管理も各教科にお願いしている。

- ⑥ 「二人担任制」に基づき全職員が生徒指導、進路指導、教科指導の最前線に立つことを原則とする。

公立学校なので転勤は必ず存在し、転勤してくるとどのくらいで東大という感覚がなくなかつかめない。したがって教員側の目線あわせが必要となる。年間行事計画（資料②）の左の列の黒い太字の会議が、進路課主催の会議である。基本的に、養護教諭まで全員出席である。年2回の進路指導会議は各学年の状況、成績、志望動向を細かく分析し、指導の方向性を共有する会議となっている。進路課からは入試研究会や他校との情報交換の場で知り得た情報も提供する。年3回の検討会では、大学別検討と個人別検討に当該学年以外の先生も出席し、現在担当している生徒の1年後2年後を見据えた進路指導を学ぶ。2月の共通テスト分析報告会では、全国の高等学校と情報交換していただいて作成した資料や、本校教諭陣による各教科の問題分析、12月以降の3年生の共テまでの指導の流れや問題点などを共有する。いわゆる入試の中締めのようなものだが、実際は中締めどころか二次対策指導の真っ最中である。全体の入試総括は5月の大学入試結果報告会で行う。それぞれの会議を通して、朝日の進路指導のあり方をおさらいしていく。だめだけではなく、どうしたらよくなるか、何を頑張らせたらいいか、生徒に彼らのこれからの人生を支えるような、よい経験をさせるにはどうしたらよいか、ということが常なるテーマである。

- ⑦ 必然性のない学年集会は設定しない。「内実のある指導（講話）」の演出を心がける。

佳き話を聞かせなければ佳き聴衆は育たない。学年集会では、学年主任と副主任が骨を砕いている。1年生の最初の学年集会ではどの巡りも、（資料③）に挙げてあるこ

とを、副主任が自分の言葉に落とし込んで語る。学年集会の度に「進路便り」も出され、卒業までに24号ほど出されている。

保護者会では、保護者の方々に安心して帰っていただくことが一番大事なことだと考えるが、加えて、学年集会で生徒に対して発信したのと同じメッセージを伝えることも重要である。学校の方針に対して保護者の信頼を得、賛同していただくと、学校と家庭とが一緒になって子どもを育てることにつながる。

⑧ 「文武両道」を貫き、青春を謳歌し、学びを通して人間形成をはかる。

2年生になり学校の中心となると、まさに「文武両道」を貫き青春を謳歌し、学びを通して更なる人間形成を図ることになる。受験の中に高校生活があるのではなく、高校生活の中に受験があるのだ、として、当たり前のことを当たり前にやれと言いながら、何にどう取り組むのかを個々に考えさせていく。常に今の学びが大学やその先の社会へとつながっていること、人としての成長が大切であることを呼びかける。

3年生では、引き続き「総合的な人間力」の形成を訴えかけるとともに、人と人との関係性の中で生きることを意識させ集団として頑張らせる。2学期当初の学園祭で完全燃焼させると同時にかならず見通しを持たせ、いつまでに何をどのくらいというのを個別に考えさせる。10月11月の本当にしんどい時期を乗り切らせるには、学園祭をとにかくヘトヘトになるまでやらせ、そのあとの共通テスト出願とともに切り替えさせる。最後まで団体戦で、学園祭の勢いがそのまま勉強に向けられる感じで、良き集団を生徒自身に作らせること、最後まで走りきらせることが肝要である。

「自走力」と言うが、放っておいても自走はしない。やはり、あれこれ仕掛けておいて走り出すのを待つ。場合によっては走り出すまで伴走してやる。できれば教員は黒子に徹して、自力で走っている気にさせてやるのがよい。

3 進路と学年をつなぐ体制

「哲学とシステム」のシステムである。(資料④) 左から順番に進路指導課と学年が上手くつながるように体制が整っている。進路企画会議、これは時程に入れてある。課長副課長と学年副主任・補習科進路担当と、指導教諭が2名入って8名で行っている。各教科から1名ずつは必ず入るようにしている。何巡りかしているメンバーも含まれるので、この時はこうしたなどのアドバイスも行われる。学年集会で何を話したとか、2年のこの時期にはこれが大切だとか、進路企画会議で共有されていくのに加えて、目の前にいる生徒の様子や入試を取り巻く環境の変化もふまえながら、先ほど述べた進路指導課基本姿勢8項目に照らして、どう学年や生徒に下ろしていくかということも議論する。そしてそれが、学年進路係や学年の担任会へと有機的に流れていくよう仕組みられている。

4 最後に

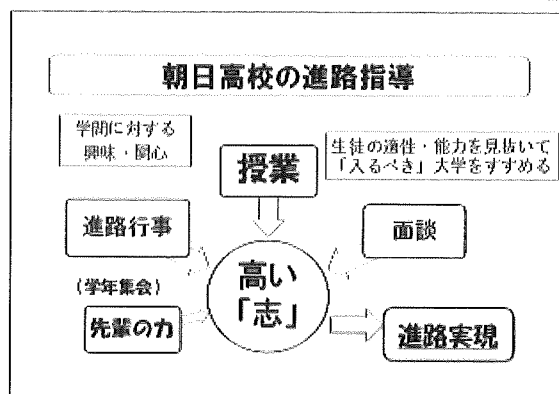
私が朝日高校の先生方にお願ひし、生徒達に望んでいることである。

「働き方改革」とはどうも「働かせ方改革」「働かされ方改革」であるような気がしている。「働く」とはもっと主体的なもので「自分はこのように働きたい」「こうせねばならんからこうするのだ」というものである。先生方には、有為な人材である生徒達を可能な限り自らの可能性に挑戦させるのだという、「自覚と意気込み」を持ってもらいたい。それから、どの学校も各年度の取組がデータ化されて校内で共有されており、すぐに検索できるけれども、形だけ真似したって仕方が無い。何のためになぜやらせるのか、ねらいは何なのか「一つ一つの意味を考えて」仕掛けてほしい。

生徒達には、「すべては事後的にわかる」ということ。これこれの対価を払ったからこれだけの成果が得られると、消費者になってはいけない。結果がわかって努力するほどつまらないことはない。朝日の生徒達は自らさらに深く思考し、自分の言葉で自分の血肉として理解してくれているように思う。

先生も生徒も本質を学び、教養を蓄え、世に貢献する。手っ取り早くほどほどの安寧を手に入れるのとは対極の、岡山朝日の進路指導をこれからも展開していきたい。

資料① 「志」を育てる進路指導



「志望」づくりではなく、「志」づくりを重視。

→進学実績はあくまで結果。志望校へのアプローチや揺さぶりは時期に応じて行うが、「志高く、生きる」ための指導が根幹にある。

資料③ 1年生

最初の学年集会

「朝日高校に入学したこと」

→①使命と責任 ②先頭に立つ勇氣・覚悟・度量 ③最高を目指す

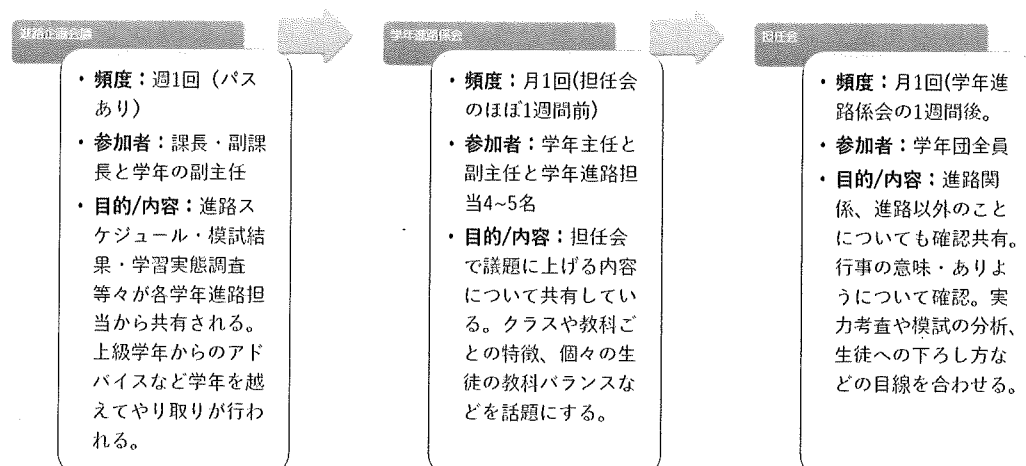
「高い志と教養」

→①高い志 ≠ 難関大・難関学部に入ること
②教養 ≠ 知識をたくさん蓄えて物知りになる

「学問に王道はない」

→①学習サイクルの確立 ②判断根拠を大切にする(本質＝核心＝汎用性)
③すべては事後的にしか分からない

資料④ 進路と学年をつなぐ体制



資料② 令和7年度 進路関係 年間行事計画

	学校行事	3年		2年	1年	補習科
4月	始業式	第1回実力考査 第1回志望調査 平日補習開始 校外模試(河合) 進路講演会	平日補習	宿題考査 学習実態調査	教科別オリエンテーション 学習到達度調査(進研)	前期開講式 第1回実力考査 第1回志望調査 校外模試(河合)
5月	大学入試結果報告会 中間考査 PTA評議員会 PTA総会 朝日桜の会懇談会(2年)	就職関係指導	平日補習		学習実態調査 合同保護者会	校外模試(駿台)
6月	学校評議委員会	第2回実力考査 第2回志望調査 校外模試(進研) 校外模試(東大)	平日補習	第1回実力考査 第1回志望調査 校外模試(駿台)	第1回実力考査 第1回志望調査 進路講演会	校外模試(進研) 第2回実力考査 第2回志望調査 校外模試(東大)
7月	期末考査 第1回進路指導会議 3年・補習科検討会 終業式 1年富士登山	保護者会 校外模試(進研) 小論文講演会	夏季補習	保護者会 校外模試(進研) 魁場・大学訪問 [修学旅行]	保護者会 校外模試(進研)	前期開講式 三者懇談 校外模試(進研) 校外模試(代ゼミ)
8月	朝日桜の会懇談会(1年)	校外模試(河合) 校外模試 [東大・京大]	夏季補習	東大・京大カイトパス (OB招聘)	進路教養講座	校外模試(河合) 校外模試 [東大・京大]
9月	始業式 朝日祭 PTA評議員会	第3回実力考査 指定校推薦出願 就職試験開始 大学入学共通テスト説明会 校外模試(ベネッセ)	平日補習	宿題考査 学習実態調査 第2回実力考査 第2回志望調査 進路講演会 校外模試(駿台)	宿題考査 学習実態調査 第2回実力考査 第2回志望調査 文理選抜カイトパス (希望者・OB招聘) 校外模試(駿台)	後期開講式 第3回実力考査 大学入学共通テスト説明会 校外模試(ベネッセ)
10月	中間考査 学校評議委員会	大学入学共通テスト出願 校外模試(ベネッセ) 調査書請求の手続説明 校外模試 [東大・京大]	平日補習	保護者面談(希望者のみ)	保護者面談(希望者のみ)	大学入学共通テスト出願 校外模試(ベネッセ) 調査書請求の手続説明 校外模試 [東大・京大]
11月	創立記念日 (OBによる講演)	第4回実力考査 第3回志望調査 国公立推薦出願開始 校外模試(ベネッセ) 校外模試(東大・京大) 大学別模試 医学部模試	平日補習	校外模試(進研)	校外模試(進研)	第4回実力考査 第3回志望調査 国公立推薦出願開始 校外模試(ベネッセ) 大学別模試 医学部模試
12月	期末考査 第2回進路指導会議 3年・補習科検討会 終業式	三者懇談 校外模試(駿台) 共通テストマラソン	冬季補習	保護者会 進研大・国大が役'22 (OB招聘) 理'22教育講演会	岡山大学一日体験 保護者会	後期開講式 三者懇談 校外模試(駿台) 共通テストマラソン
1月	始業式 部活動講演会(OB招聘) 3年・補習科検討会 1年スキー教室	共通テストマラソン 調査書発行 共通テスト受験 共通テスト自己採点 特別授業 出願面談 国公立大2次出願	特別授業	宿題考査 第3回実力考査 第3回志望調査 学習実態調査 校外模試(駿台)	宿題考査 学習実態調査 第3回実力考査 第3回志望調査 校外模試(進研)	共通テストマラソン 調査書発行 共通テスト受験 共通テスト自己採点 特別授業 出願面談 国公立大2次出願
2月	PTA評議員会 学校評議委員会 大学入学共通テスト分析報告会 学年末考査	国公立大(前期) 私立大学合格発表 小論文講演会 面接・小論文指導	特別授業	校外模試(進研) 医学部が役'22	校外模試(駿台)	国公立大(前期) 私立大学合格発表 小論文講演会 面接・小論文指導
3月	卒業式 終業式	公立大(中期) 公立大(後期) 国公立大合格発表	特別授業	前期合格者によるカイトパス 小論文模試[学研]	進研大カイトパス (OB招聘)	公立大(中期) 公立大(後期) 国公立大合格発表

「学びと向き合うプロジェクト」

鳥取県立境高等学校 教諭 手島 斉人

1 沿革

本校は鳥取県西部弓浜半島の先端にある古くから漁港として栄えてきた境港市の唯一の普通科高校である。旧制中学からの流れをくみ、いろいろな課程、学科が併設されていたが、平成2年度から全日制課程のみ、平成17年度から普通科単独校となる。令和2年2月に創立80周年をむかえた歴史ある高校である。

普通学科は平成4年度に1学年6学級となり、平成23年度から現在まで5学級となっている。また、平成15年度入学生から単位制が導入されて



ている。現在では1年次生は特色入試の体育部活動と学力で入学してきた生徒を中心にそれぞれ運動部活動クラスと特進クラスを作っている。2年次生からは文理分け、5教科型の生徒の中から希望者で特進クラスを編成している。現3年生は定員の200名入学でスタートしているが、現1、2年次生は定員を割れている。米子市からの通学生も50%程度おり米子市の受験者の影響も少なくないが、境港市の人口も平成2年の3万8千人から3万2千人への6千人の減少しており、今後の学級減も危ぶまれている。

2 現状

国公立大学から民間就職まで多岐にわたる進路希望に対応している。コロナ後、民間就職者が多少減ったが、0名になることはないと思われる。地元企業からも要請は多い。しかし、就職希望者のうち、公務員希望者が占める割合が高くなっている。事務職はさほどではないが警察、消防、海上保安、自衛隊の希望者が多い。学校の魅力として部活動を掲げており、そこで頑張った生徒が志望する割合が高い。

大学への進学率は50%前後に留まっている。コロナ後、看護師志望の生徒が増えた。これらの生徒の目が大学に向くか、専門学校に向くかが進学率に影響を与えている。山陰唯一の私立大学が看護学部しかなく、金銭的にそこを目指せる生徒はいいがそうでない生徒は専門学校へ進んでいくことになっている。

国公立大学合格の校内目標数値は30名となっている。近年多くの年で定員割れをしている状況では目標達成は難しいように感じている。しかし、多様な入試が行なわれるなかで、卒業生の15%は国公立大学に合格することが何とか達成可能ではないかと感じている。(過去5年の進路状況は表1を参照)

ただ、入学者の学力については低下を感じている。それが結果として現れたのが現2年次生に行った入学当初のスタディサポート(ベネッセ)である。国語のGTZがB3からC1に下がった。国語力で大学入試をクリアできていた生徒も多くいたので、進路指導部として委員会の問題提起をした。国語科も重く受け止めていただいて取り組みを丁寧に行っていただいて11月の進研模試では国語については過年度並みの結果を残すことができた。

【表 1】

卒業生進路先 上段:人数、下段:%	大学 国公立	大学 私立	短期大学 公立	短期大学 私立	専門学校 医療系	専門学校 その他	就職 公務員	就職 民間	未決定	卒業生
令和6年度卒業生	20 12	62 37	2 1	7 4	15 9	32 19	12 7	11 7	8 5	169 100
令和5年度卒業生	20 11	66 35	3 2	14 7	33 17	26 14	10 5	7 4	10 5	189 100
令和4年度卒業生	24 14	70 40	2 1	16 9	26 15	20 11	6 3	6 3	7 4	177 100
令和3年度卒業生	11 7	57 34	2 1	11 7	15 9	39 23	9 5	11 7	11 7	166 100
令和2年度卒業生	23 12	56 29	2 1	18 9	19 10	38 20	9 5	12 6	16 8	193 100

3 「学びと向きあうプロジェクト」

委員会での問題提起に対して、声をかけてくださった先生がおられて、話を聞くとその先生が感じていることは、まず「学ぶ」意義を知らないから、勉強しないのではない。次に進路の目標が持てないままに文理選択を行い、進路目標が決まったときにミスマッチとなっているケースが多くないか。これらことを解決ができるように何か行動しないとよい方向にいかないのではないか。ということでした。

その後に話を重ね、夏休み明けの委員会で提案することになった。提案内容は「文理選択を3年次に行う」、「1年次の1学期中間考査の実施にこだわらず、学びを考える期間を設ける」の2点であった。議論の末、「文理選択を3年次に行う」は行わない。「1年次の1学期中間考査の実施にこだわらず、学びを考える期間を設ける」はプロジェクトチームで実施内容を詰めて提案することとなった。ここからプロジェクトがスタートする。

プロジェクトチームは5教科から1名ずつ5名、体育科1名、そして私の1名の7名で別紙の案を検討した。「思考することの面白さ」、「他者の考えを受け入れる」、「あきらめず挑戦する」の3つの点がこれから高校生活で身につけていく力であることを示すように考えていった。後に生徒には「好奇心」、「協働」、「挑戦」という言葉に変化させて生徒に示し、頭に入れて学校生活を過ごしてほしいキーワードとして示している。

全体にこれから行うことの周知する時間を「学びの学年集会」、クラス単位で教科に関係ない内容で実施する時間を「学びのイントロダクション（クラス）」、クラス単位で教科の内容で実施する時間を「学びのイントロダクション（各教科名）」を柱として計画した。その他にも体育の授業内で行っていた集団行動や年度当初に行われていた図書オリエンテーションなどもプロジェクトの中に入れることとした。本校では総合的な探究の時間を「境考学」と名付けているがそのオリエンテーションについても3つのキーワードと結びつける内容を入れてもらえるようにした。

また、本校では「英語多読」という科目を開講している。特進クラスは必須であるが他のクラスは希望者（8限目に飛び出し）で10～30名の生徒が希望してくる。その特徴を調べて入学してくる生徒も少なからずいる。しかし、近年1年次生の選択者が減少傾向にあった。ここの部分を解消していきたいこともあったので、学年集会で10分程度の説明あるだけだったものをこのプロジェクトに取り入れ、実際に体験することもさせていった。このことによって希望者も増え、実際に体験させたことが取り組んでみようという気持ちを作ったと考えている。

2年次生から文理選択を変更しなかった代わりに1年次生での進路選択にかける時間を増やすことが会議で話が出た。しかし、実際には進路LHRを入れるには特設するしかなく、自分の適性検査の結果を振り返って進路を考えることは結論を出すまでにはなかなか難しいことだと思っている。それを少しでも補うために進路を考えることが大切であるという趣旨の講演会を行っていただいた。

最後に今年度から導入するか迷ったが、言語力・表現力を上げるための講座を言語活動と名付け行った。私が危機感を持った1つの要因、国語の力の低下を補うものとして考えている。回数も1回に限ったので内容も説明する順序について考えるものとした。

4 3つのキーワード「好奇心」、「協働」、「挑戦」

今年度はあまり強調することはなかったが、SDG'S (Sakai-HS Deep learner's Goals) とともに、ゴールに「考えて学ぶことの楽しさを実感（体感）する」を掲げて学びと向きあうプロジェクトは進んだ。人事異動でそもそもこのプロジェクトをやろうと声をかけてくださった先生が転勤、その先生が考えたことを具現化された先生は新規で教務主任へ、異なる視点から案を出してくださった主幹教諭が教頭へなられたこともあり、今年度当初動きは自分中心とならざるを得なかった。進路指導部のことと学びと向きあうプロジェクトのことを2つ同時に行うあわただしい4月当初であった。そんな中なので学年集会については私が担当することとした。そしてその中で3つのキーワード「好奇心」、「協働」、「挑戦」について説明し、高校生活を送っていく中で意識してほしいキーワードであることを訴えた。

「好奇心」については「授業から発見しよう」、「知ることを楽しもう」「疑問をもとう」、「質問をしよう」という4つの柱を立てた。1年次生2クラスで授業をしているが、これについては高くできているクラスがある。特進クラスでも運動部活動クラスでもないクラスがそうになっている。特に「質問をしよう」ができています。

「協働」については「安心できる環境をつくろう」、「対話をしよう」、「共感しよう」、「表現しよう」という4つの柱を立てた。「対話をしよう」、「表現しよう」は義務教育のおかげでできるようになっている。特進クラスで難しいのは「安心できる環境

をつくろう」である。特に4月はお互いにけん制しあっている状態である。ただ、一部の能力の高い生徒によってクラス運営は何とかなっている。

「挑戦」については4つの柱を「問題に向き合おう」、「表現し続けよう」、「失敗を次の糧にしよう」、「よりよい結果を求め続けよう」にした。この部分については本校生徒の弱い部分で根気強く指導していかないといけない部分であると考えている。

この3つのキーワードのうち、「好奇心」と「協働」の共通部分を「多様な視点」、「好奇心」と「挑戦」の共通部分を「課題発見」、「協働」と「挑戦」の共通部分を「フィードバック」と名付け、生徒に示した。入学時の学年集会だけでここまで浸透できるかわからないが、意識の高いときだからこそ、生徒に浸透させたいことである。



5 基礎学力

令和5年度から特進クラスの2年次生、3年次生の講習参加を必須としなくなった。理由は主に2つあり、1つは教員側の働き方改革の一環、もう1つは部活動を頑張りたい生徒が講習に参加することが必須となっているため特進クラスを希望しない生徒が多くなってきたためである。1つ目の目的は達成されているか疑問であるが、2つ目の目的は多少なりとも効果はあった。しかし、生徒に何らかの手当てをしていかないといけないのが本校の現状である。そこで2年次生全員と3年次生の特進クラスと他クラスの希望者にリクルート社の「スタディサプリ」を導入して、課題配信と自分で取り組む習慣がついた生徒が結果を残してきた。

そこで落ち込んできている生徒の学力定着のため、今年度から1年次生から全員導入することとした。そこに求めているのは反復練習まさに「問題に向き合おう」、「表現し続けよう」、「失敗を次の糧にしよう」、「よりよい結果を求め続けよう」と「フィードバック」である。ここが克服できれば伸びてくるのではないかと考えている。

6 終わりに

この授業をすることによって、生徒たちに求めたことを教員側にも求めていることになる。プロジェクトチームを再編してさらに生徒たちが意識して学習していけるようにこのプロジェクトを実り多きものとしていきたい。そして、私たち教員も課題に対して多様な視点を持ち、協働して挑戦していこうと思う。

「多様化する大学入試に向けた指導実践について」

山口県立下関西高等学校 教諭 松村 成通

1 本校の概要

「自主・自律」「自学・自習」の精神による自主性を重視した校風を伝統とし、校是「天下第一関」のもと、高い知性・豊かな情操・強い意志・健やかな身体を育み、円満な人間性と社会性を備えた真に次代を担うにふさわしい生徒の育成を目指し、ほぼ全員の生徒が大学進学を目指している。現在の全校生徒は660名、3学年の合計が18クラスで、全学年とも普通科4クラスに加え、2、3年次に探究科が2クラスずつ、1年次に今年度からスタートした文理探究科2クラスが設置されており、2年次から普通科は文系・理系、探究科と文理探究科は人文社会コースと自然科学コースに分かれ、それぞれの進路に即した履修をしている。最近の国公立合格率はやや物足りないが、それは生徒の多くがハイレベルの目標に向かってチャレンジしている結果であり、今年度も50名以上の生徒が浪人して、高みを目指している。今後は、特に東大を始めとする国立難関10大学への合格者数を増加させることが大きなミッションで、その実現に向けて新たな取り組みを設けている。

2 指導実践について～不易と流行～

<不易>

以前より、進路意識の高揚や学力向上を図るための取り組みとして、進路講演会や社会人セミナー、大学セミナー、出前授業、進路面談、模擬試験、土曜日課外などを実施し、一定の成果をあげてきた。しかし、令和7年度入試が新学習指導要領の下で行われる初めての選抜として、入試環境に大きな変化をもたらし、入試の多様化が進む中で、総合型選抜や学校推薦型推薦の募集人員増加が大きく注目されている。本校は探究科設置校であるが、それらに対する進路指導は不十分であり、今後に向けて検討が必要である。一方で、自己の進路決定において保護者の意向を汲む生徒が急増し、その影響から、高いモチベーションを維持しながら学力向上を図る生徒が減少している点も大きな課題である。そこで、従来の指導実践に対するチェックを十分に行いながら、必要に応じて、スクラップや改善を推し進めているところである。

<流行>

A 目標設定について

生徒の合格状況が向上している学校は校訓や方針、進路指導の軸がしっかりしていて、長期的展望に立った指導ができている。そこで、本校も生徒の状況を十分に観察、分析した上で、進路指導部の全体目標を固定化するとともに、年度ごとの努力目標を決定し、それらについて生徒、保護者に進路講話やPTA総会などで周知するようにしている。

B 指導実践について

① 志望者集会

放課後を中心に希望者を募って、様々な集会を新たに設定した。2年次3月の総合型選抜志望者集会では学校推薦型選抜との違いや志望理由書の作成、学習対策を中心に説明している。1年次12月、2年次8月、3月、3年次7月は難関大学集会を開催している。そこでは年次による内容の違いはあるが、難関大学の

魅力や特徴について、難関大学を目指す生徒に必要な考え方を中心に説明している。
3年次7月の東大、京大志望者対象の超難関大学集会は東大入試を例に、各科類の特徴と知っておきたい事、教科別再現答案分析や学習方法について、3年次7月の医学部志望者集会は、昨年度入試のデーター、医学部の魅力や入試の特徴、医学部受験の対策についてそれぞれ説明している。

② 「総合的な探究の時間」の取り組みについて（普通科のみ）

普通科では、探究科で実施している課題研究を、今まで培ってきた探究科の指導ノウハウを応用しながら推進している。また、1年次、2年次では新たに起業家精神を涵養することを目的とするアントレプレナーシップ教育を外部委託で導入し、生徒の進路意識を高めるための動機付けを図っている。取り組みの内容は1年次では「自己探究・理解プログラム」として、マンドラチャートの作成、働くことについて考える、失敗や挫折について語りあう、ディベートを実施する、お金について考えるなど多種多様でこれらの活動を通して、生徒がメタ認知できるように取り組んだ。2年次では「企画書作成プログラム」として、「じぶんがやりたいこと×誰かのためになること」を目標に自分の関心があるテーマを発見し、企画書を作成し、フィールドワークを実施している。

③ 他校との連携事業

本校では2つの他校連携事業を実施している。1つ目は山口県立宇部高等学校との連携事業である。宇部高校とは2泊3日の東大見学会と薬学に関する実験実習を山口東京理科大学薬学部の協力により実施している。2つ目は福岡県立小倉高等学校、東筑高等学校、九州国際大学附属高等学校との連携事業である。こちらは東京大学の協力によりディスカッション形式のゼミナールを実施したが、今年度も同じ形式で実施する予定である。

④ 保護者に関係する進路関係行事

保護者に対する本校進路指導への理解と保護者との信頼関係の構築を目標に各行事を実施し、日常的に進路に関する相談をしやすい環境を整えたいと考えている。以前から、夏季休業中に総務部主催で進路研修会を実施していたが、それに加え、2年前より3年次保護者を対象に進路説明会を新設した。今年度も6月に「わが子の進路実現に向けて大人が準備すること」と題して、昨年度入試の振り返り、進学費用について、大学選びのポイント、大学入試制度、共通テスト電子化、保護者に理解して欲しいことなどについて説明した。また、昨年度より1年次保護者を対象に進路説明会を新設した。ここでは、進学費用、大学入試制度、わが子の進路に対する保護者の考え方について説明した。さらに、保護者進路講演会を年間2回新たに設けたが、今年度は9月に2回、実施する予定である。

⑤ その他

外的リソースとして本校を卒業したばかりの大学生を積極的に活用している。放課後の自習室の監督などの進路補助業務、進路のしおりへのメッセージの寄稿、東大見学会や大学セミナーの講師、九大訪問におけるゲストスピーカーなどを実施し、生徒にとって、有意義な外部刺激となっている。また、高校訪問、大学訪問、予備校が主催する研修、東北大学で実施されている大学入試学会などに中堅若手教員が参加できる体制を整え、進路に関する自己研鑽の機会を設けてきた。

大 会 役 員

大会 長	全高進会長	吉田 寿美	東京都立調布北高等学校長
大会副会長	全高進副会長	松田 晴美	東京都立杉並高等学校長
大会副会長	全高進副会長(私学代表)	橋本 準一	大東文化大学第一高等学校長
大会副会長	北海道ブロック長	諸橋 宏明	北海道札幌工業高等学校長
大会副会長	東北ブロック長	川村 高広	宮城県泉松陵高等学校長
大会副会長	東京ブロック長	杉森 共和	東京都立日本橋高等学校長
大会副会長	関東ブロック長	為成 雄司	神奈川県立茅ヶ崎高等学校長
大会副会長	北信越ブロック長	西田 昌弘	福井県立敦賀工業高等学校長
大会副会長	東海ブロック長	小川 浩司	愛知県立愛知商業高等学校長
大会副会長	近畿ブロック長	荒田 和子	京都府立向陽高等学校長
大会副会長	四国ブロック長	馬場 文彦	香川県立志度高等学校長
大会副会長	九州ブロック長	緒方 康二	佐賀県立佐賀商業高等学校長
大会委員長	中国ブロック長(島根)	渡邊 勝義	島根県立島根中央高等学校長
大会副委員長	中国ブロック(鳥取)	堀尾 英明	鳥取県立鳥取工業高等学校長
大会副委員長	中国ブロック(岡山)	古澤 氏由児	岡山県立瀬戸南高等学校長
大会副委員長	中国ブロック(広島)	松島 康浩	広島県立呉宮原高等学校長
大会副委員長	中国ブロック(山口)	山本 弦	山口県立下関工科高等学校長
大会 総務	全高進事務局長	福本 剛史	埼玉県立越谷総合技術高等学校

大 会 実 行 委 員

実行委員長	事務局長(島根)	佐野 剛	島根県立島根中央高等学校
実行副委員長	事務局長(鳥取)	太田 剛	鳥取県立鳥取工業高等学校
実行副委員長	事務局長(岡山)	石上 浩次	岡山県立瀬戸南高等学校
実行副委員長	事務局長(広島)	田下 真志	広島県立呉宮原高等学校
実行副委員長	事務局長(山口)	末永 慎一	山口県立下関工科高等学校

運 営 委 員

小川 敦	山口県立柳井商工高等学校
森田 早苗	山口県立岩国総合高等学校
新坂 修一	山口県立岩国工業高等学校
渡辺 崇洋	山口県立新南陽高等学校
岩永 忠	山口県桜ヶ丘高等学校
松本 定則	山口県桜ヶ丘高等学校
加納 和宏	山口県鴻城高等学校
児玉 成功	山口県立山口農業高等学校
志熊 淳子	山口県立山口農業高等学校
岩本 忠之	山口県立宇部西高等学校
井本 幸輝	山口県立宇部西高等学校
竹田 智也	成進高等学校
小笠原 新	山口県立大津緑洋高等学校水産校舎
國弘 崇	山口県立大津緑洋高等学校水産校舎
杉山 和歌奈	萩光塩学院高等学校
大会事務局	山口県高等学校進路指導協議会
山本 弦	山口県立下関工科高等学校長
三谷 和徳	山口県立豊浦高等学校長
上田 晃久	下関国際高等学校長
中谷 真史	山口県立下関工科高等学校教頭
藤村 信夫	山口県立下関工科高等学校事務長
末永 慎一	山口県立下関工科高等学校
米田 明	山口県立下関工科高等学校
桑野 弘美	山口県立下関工科高等学校
河合 哲郎	山口県立下関工科高等学校

総 務 委 員

石田 史彦	下関国際高等学校
立花 唯香	下関国際高等学校
中戸 峻	山口県立豊浦高等学校
柳 宣之	山口県立豊浦高等学校
藤田 房江	山口県立山口農業高等学校西市分校
喜多 浩	山口県立下関北高等学校
河原 敏男	山口県立田部高等学校
桐原 美紀	下関商業高等学校
佐々木 大輔	下関商業高等学校
橋本 智子	山口県立長府高等学校
伊達 裕司	早稲高等学校
藤野 恭平	山口県立下関西高等学校
吉原 美樹	下関短期大学附属高等学校
石崎 聡恵	下関短期大学附属高等学校
加藤 真弓	下関南総合支援学校
川村 悠子	下関総合支援学校
山根 真弓	山口県立下関南高等学校
齋藤 晋	山口県立下関南高等学校
寺西 穂香	梅光学院高等学校
俣野 凌摩	梅光学院高等学校
溝部 眞一郎	山口県立下関双葉高等学校
村上 和久	山口県立豊浦総合支援学校
中島 崇	山口県立下関中等教育学校

全国進学指導研究大会規程

(目 的)

第1条

全国進学指導研究大会(以下大会という)は、望ましい上級学校への進学指導の在り方を研究し、その普及と発展を図ることを目的とする。この目的を達成するため、全国高等学校進路指導協議会(以下全高進という)は大会開催の援助を行う。

(開催地の選定)

第2条

原則として年1回、各地区単位で開催する。ただし、同一年複数地区・同一地区での連続開催については常任理事会で協議の上決定する。

(大会の主催)

第3条

大会の主催は、全高進と開催地区の共催とする。

開催の後援依頼および報告は、文部科学省および全国高等学校長協会、公益財団法人日本進路指導協会には全高進が行い、教育委員会等には開催地区が行う。

その他の共催及び後援についてはあらかじめ全高進と開催地区が協議する。

(開催の決定及び通知)

第4条

原則として常任理事会で決定し通知する。

(助成金)

第5条

全高進は開催地区に助成を行う。

(会計報告)

第6条

開催地区は、大会終了後速やかに全高進の事務局に会計報告をする。

(実施に関して必要事項)

第7条

この大会に際して必要な事項は別に定める。

附 則 本規程は令和6年7月24日に「大学進学指導研究大会規程」の改正を以て施行する。

今までの開催地区			大会開催順序: 北海道→中国→北信越→四国→関東→近畿→九州→東海→東北				
1995	H07	第1回	神奈川	2012	H24	第18回	九州(福岡)
1996	H08	第2回	東京	2013	H25	第19回	東海(静岡)
1997	H09	第3回	東京(全国大会)	2014	H26	第20回	東北(宮城)
1998	H10	第4回	東京(全国大会)	2015	H27	第21回	北海道
1999	H11	第5回	近畿(大阪)	2016	H28	第22回	中国(岡山)
2000	H12	第6回	東京(全国大会)	2017	H29	第23回	北信越(富山)
2001	H13	第7回	東京	2018	H30	第24回	四国(香川)
2002	H14	第8回	近畿(京都)	2019	R01	第25回	関東(茨城)
2003	H15	第9回	九州(福岡)	2020	R02	第26回	近畿(兵庫)中止
2004	H16	第10回	東海(愛知)	2021	R03	第27回	九州(宮崎)
2005	H17	第11回	東北(宮城)	2022	R04	第28回	東海(岐阜)
2006	H18	第12回	北海道	2023	R05	第29回	東北(岩手)
2007	H19	第13回	中国(広島)	2024	R06	第30回	北海道
2008	H20	第14回	北信越(新潟)	2025	R07	第31回	中国(山口)
2009	H21	第15回	四国(愛媛)	2026	R08	第32回	北信越(長野)[予定]
2010	H22	第16回	関東(千葉)	2027	R09	第33回	四国(徳島)[予定]
2011	H23	第17回	近畿(大阪)	2028	R10	第34回	関東(栃木)[予定]

令和7年度 全国高等学校進路指導協議会役員等

会 長	吉田 寿美	東京都立調布北高等学校長
副 会 長【常任理事】		
北海道ブロック	諸橋 宏明	北海道札幌工業高等学校長
東北ブロック	川村 高広	宮城県泉松陵高等学校長
関東ブロック	為成 雄司	神奈川県立茅ヶ崎高等学校長
東京ブロック	杉森 共和	東京都立日本橋高等学校長
北信越ブロック	西田 昌弘	福井県立敦賀工業高等学校長
東海ブロック	小川 浩司	愛知県立愛知商業高等学校長
近畿ブロック	荒田 和子	京都府立向陽高等学校長
中国ブロック	渡邊 勝義	島根県立島根中央高等学校長
四国ブロック	馬場 文彦	香川県立志度高等学校長
九州ブロック	緒方 康二	佐賀県立佐賀商業高等学校長
私 学	橋本 準一	大東文化大学第一高等学校長
会 副 会 長	松田 晴美	東京都立杉並高等学校長
監 事	中山 望	埼玉県立浦和商業高等学校長
監 事	小山 克之	東京都立足立高等学校長

ブロック事務局長【常任理事】

北海道ブロック	梶 邦明	北海道札幌工業高等学校
東北ブロック	渡邊 武	宮城県泉松陵高等学校
関東ブロック	並木 俊恭	神奈川県立希望ヶ丘高等学校
東京ブロック	多田 早穂子	東京都立小台橋高等学校
北信越ブロック	田中 逸郎	福井県立敦賀工業高等学校
東海ブロック	三谷 祐二	愛知県立愛知商業高等学校
近畿ブロック	牧崎 高德	京都府立京都すばる高等学校
中国ブロック	佐野 剛	島根県立島根中央高等学校
四国ブロック	眞鍋 祥江	香川県立志度高等学校
九州ブロック	徳永 清成	佐賀県立佐賀商業高等学校

事務局

事務局 長	福本 剛史	埼玉県立越谷総合技術高等学校
事務局次長	松尾 拓也	千葉県立大網高等学校
幹事		
江本 圭之介	埼玉県立三郷工業技術高等学校	長谷川 恵美 埼玉県立浦和商業高等学校
町田 進一	埼玉県立熊谷商業高等学校	細矢 良太 埼玉県立越谷南高等学校
小出 和代	東京都立東久留米総合高等学校	多田 早穂子 東京都立小台橋高等学校
桜井 伸一	東京都立晴海総合高等学校	竹田 大起 千葉県立千葉商業高等学校

進学指導研究委員

委員長	桜井 伸一	東京都立晴海総合高等学校
能美 悟	神奈川県立新羽高等学校	藤田 正彦 神奈川県立座間総合高等学校
細矢 良太	埼玉県立越谷南高等学校	小出 和代 東京都立東久留米総合高等学校

就職指導研究委員

委員長	江本 圭之介	埼玉県立三郷工業技術高等学校
松尾 拓也	千葉県立大網高等学校	竹田 大起 千葉県立千葉商業高等学校
柿沼 浩二	埼玉県立妻沼高等学校	黒田 健夫 神奈川県立上矢部高等学校
並木 俊恭	神奈川県立希望ヶ丘高等学校	浦部 ひとみ 東京都立晴海総合高等学校
長谷川 恵美	埼玉県立浦和商業高等学校	吉岡 悟 埼玉県立川口工業高等学校
町田 進一	埼玉県立熊谷商業高等学校	

進路学習研究委員

委員長	多田早穂子	東京都立小台橋高等学校
松尾 拓也	千葉県立大網高等学校	桜井 伸一 東京都立晴海総合高等学校
長谷川 恵美	埼玉県立浦和商業高等学校	